

平成20年度採択 「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

京産大発ファシリテータマインドの風

～ファシリテーションの定着による学生支援改革～

平成21年度

活動報告書

緒 言

F 工房が開設され、早くも丸一年が経とうとしている。ファシリテーションの普及拠点が学内に設置されることなど、ほんの数年前までは誰も予想していなかったに違いない。

学外に目を転じて、ファシリテーションが根をおろしていると思われる少数の大学を除けば、また一部のゼミ授業の現場を除けば、我が国の大学はファシリテーションとは馴染みの薄いところであった。

本学で流れが変わったのは、平成 16 年度から複数のキャリア形成支援科目が開講されたときである。これらの科目に共通していたのは、授業のコンテンツは学生自身が個人ワークやグループワーク、インターンシップやインタビューを通してつくるようデザインされており、教員による講義は最少部分に抑えられていたことであった。授業を運営する側は、授業デザインにそってコンテンツづくりを支援する人すなわちファシリテータと位置づけられた。ここにおいて初めて、「支援」というキーワードが教学の領域に導入され、同時にその「支援」を具現化するマインドおよびツールとしての「ファシリテーション」が注目されるようになった。

やがてキャリア形成支援科目の関係者は、ファシリテータによって支援された受講生がめざましい成長を遂げるさまを目の当たりにする。こうして支援型キャリア教育は大きな成果をもたらし、それと呼応してファシリテーションの重要性が認識されるようになった。このような流れの中から、支援型の教育やその他のプログラムをキャリア教育以外の領域に広げていくことが提案され、そのツールとしてファシリテーションの普及拠点が構想された。この構想は平成 20 年度学生支援 G P として採択され、平成 21 年 4 月には 1 号館 1 階に「F 工房」として開設されるに至った。

この小冊子は、開設時から平成 22 年 3 月に至るまでの、F 工房の活動記録である。この間、正課内外のさまざまな領域で、さまざまなプログラムが施行され、さまざまな立場の人たちがファシリテータとして学生の支援にかかわった。そうした人たちは、ファシリテーションが決して資格や特殊技能などではなく、ある種のノウハウと経験に裏打ちされた、協働のプロセスを支援していこうとするマインドのようなもの、と感じ始めている。そうしたマインドが多くの人々によって共有されたとき、それは「文化」と呼ばれてしかるべきものとなる。この小冊子は、そうしたマインドや文化がどこまで普及しているのかを測るための指標であり、F 工房事業評価の基礎資料でもある。支援やファシリテーションに関心のあるすべての人々に読んでいただきたいと考えている。

C O N T E N T S

第 1 章 平成 21 年度活動報告

平成 21 年度 F 工房行事と来所者数.....	2
平成 21 年度 F 工房活動実績報告	5
I. F 工房主催事業.....	5
II. 他部門との協働事業	11
III. キャリア形成支援教育科目への参画.....	18
IV. その他科目への参画.....	22
V. 広報活動.....	24
VI. 研究会、研修会などへの参加	30
小括 -平成 21 年度活動をふりかえって-	32
資料	35

第 2 章 中間報告会報告

中間報告会概要.....	50
開会挨拶（副学長）.....	52
第 1 部 「F 工房この 1 年」.....	53
第 2 部 ファシリテーションの具体的実践例	59
第 3 部 「体験！ファシリテーション」報告	81
閉会挨拶（キャリア教育研究開発センター長）.....	85

第 1 章 平成 21 年度活動報告

平成21年度 F 工房行事と来所者数

年間来所者のべ総数 1070 名

(内訳) 学生 810、職員 131、教員 87、学外者 42

4月

来所者数

総数	154	学生	91	職員	42	教員	10	学外者	11
----	-----	----	----	----	----	----	----	-----	----

3日オープニングセレモニー。

オープンに伴う見学と共に、新学期スタートということもあり、教室や学内施設に関する問い合わせでも来所する学生が多かった。学生からの新入生歓迎の催し、教員からの初回講義でのアイスブレイクの相談が多かった。

16日実施の「自己発見と大学生活」授業の事前打合せ、「キャリア・Re-デザインI」クラスミーティング、ゲーム開発ミーティングのための利用があった。20日「ファシリテータミニ研修会」実施。22日学外より他大学教職員が来訪。

5月

来所者数

総数	105	学生	75	職員	12	教員	14	学外者	4
----	-----	----	----	----	----	----	----	-----	---

各授業支援に伴い教員の来所者が増加した。また「キャリア・Re-デザインI」個人面談室としても利用された。また、学生および教職員によるミーティングが活発に行なわれた。(ピア・サポータースタッフ、教学センター職員、学生ファシリテータ、「キャリア・Re-デザインI」クラス運営ミーティング) 教員からの授業運営相談、教育寮合同サマーセミナーの打合せ、学生の学生によるプレゼン練習会、文化学部専門科目「コミュニケーション理論」、文化学部スターティングセミナー振り返りミーティングが行われた。また、特に用がなくとも立ち寄る学生が現れはじめ、学内での「居場所」としての役割が発揮されはじめた。

6月

来所者数

総数	128	学生	109	職員	9	教員	8	学外者	2
----	-----	----	-----	----	---	----	---	-----	---

「ファシリテーションフォーラム」参加報告の場として、1日～5日「ファシリテーション体験記ミニ報告会」をランチタイムに実施。教育寮班長との「サマーセミナー」についての準備を開始した。29日、「演習1」(経営学部) 事前ファシリテータ研修を作業場にて実施。その他個別の授業に関する相談、打合せがあった。

7月

来所者数

総数	94	学生	75	職員	4	教員	10	学外者	5
----	----	----	----	----	---	----	----	-----	---

「キャリア・Re-デザインI」打合せ、「サマーセミナー」事前打合せ、「寮班長研修」打合せとして利用。また F 工房チラシ作成のための打合せが複数回行なわれた。8日、他大学教職員来訪。

8月

来所者数

総数	20	学生	8	職員	3	教員	6	学外者	3
----	----	----	---	----	---	----	---	-----	---

夏休み中のため来所者数は停滞。

5日「キャリア・Re-デザインI 取り組み共有の夕べ」ミーティングが行なわれた。

9月

来所者数

総数	25	学生	15	職員	7	教員	0	学外者	3
----	----	----	----	----	---	----	---	-----	---

9日、10日の合宿に伴い、夏休み中にもかかわらず来所する学生は増加に転じた。学内広報誌「サギタリウス」取材のため、広報室スタッフが来訪、ファシリテーションに興味を持たれ、複数回立ち寄られた。「寮班長研修」の事前ミーティングが複数回行われた。

10月

来所者数

総数	121	学生	87	職員	15	教員	13	学外者	6
----	-----	----	----	----	----	----	----	-----	---

秋学期を迎え、再び学生の来所が活発になる。13日、15日ワークショップ「ふせんの達人をめざそう」、20日、22日「ファシリテーションのいろは」を開催。26日実施イベント「Sing For Darfur」、文化学部「コミュニケーション理論」、広報業務依頼打合せが複数回行われた。

11月

来所者数

総数	139	学生	111	職員	14	教員	10	学外者	4
----	-----	----	-----	----	----	----	----	-----	---

ミニイベントとして「アイスブレイク」にフォーカスして、16日・18日「自己紹介編」、24日・27日「すぐできる編」、30日「ウォーミングアップ編」を実施。「キャリア・Re-デザインI」面談室としての利用。ゼミ合宿でのアイスブレイク、教職サークル、寮生打合せ、法学部「プレップセミナー」および「3年次演習」打合せを実施。

12月

来所者数

総数	114	学生	86	職員	14	教員	11	学外者	3
----	-----	----	----	----	----	----	----	-----	---

3日「アイスブレイク」、14日、17日「超基本 ファシリテーション・グラフィック」と多数のミニイベントを開催した。「キャリア・Re-デザインI」打合せ、ウォーミングアップセミナー振り返りイベント、法学部「演習」事前打合せ実施。中旬より「学生支援GP中間報告会」の学生ファシリテータを募集しはじめ、21日にキックオフミーティングを開催した。17日「ファシリテーション普及推進委員会」の実施。8日、他大学教職員来訪。

1月

来所者数

総数	93	学生	85	職員	4	教員	4	学外者	0
----	----	----	----	----	---	----	---	-----	---

O/OCF—PBL 授業課題「4年次生インタビュー」実施。「高大連携プログラム」および「中間報告会」プログラム作成や事前打合せが複数回行なわれた。(出入りが頻繁にあったため、来所者の記録が正確でない可能性あり。)

2月

来所者数

総数	60	学生	56	職員	3	教員	1	学外者	0
----	----	----	----	----	---	----	---	-----	---

「高大連携プログラム」事前打合せ、27日開催「学生支援GP中間報告会」プログラム打合せ、教員からの新学期授業相談、ファシリテーションに興味を持った学生来所。23日、「ファシリテーション普及推進委員会」実施。

3月

来所者数

総数	17	学生	12	職員	4	教員	0	学外者	1
----	----	----	----	----	---	----	---	-----	---

「ウォーミングアップセミナー」、「寮班長研修」事前打合せを実施。4日「第9回ファシリテータ研修会」開催。4日他大学教員が来訪。10日民間企業からの来訪者あり。

平成 21 年度 F 工房活動実績報告

I. F 工房主催事業

■オープニングセレモニー

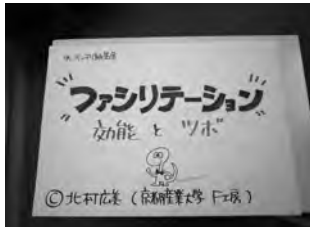
知恵袋 道具箱 作業場



日 時	4月3日(金) 14:00 ~ 16:30
場 所	F 工房
内 容	F 工房のオープンを記念して、午後 2 時よりオープニングセレモニーが開催された。並松副学長と若松キャリア教育研究開発センター長からの挨拶の後、テープカットに代えて手作りのくす玉を割っていただいた。「知恵袋」ではファシリテータによるコンサルティング、「道具箱」では学生ファシリテータによるコミュニケーションゲーム実演、「作業場」ではこれまでの活動のスライドショーがそれぞれ行なわれた。参加者には F 工房スタッフからのグリーティングカードが贈られた。
参加者	24 名(学生 11 名、教員 2 名、職員 11 名)
成 果	F 工房の所在を周知する機会となり、ファシリテータマインドを共有する最初の機会となった。

■ミニイベント「ファシリテーション・フォーラム 2009」報告会

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	6月1日(月) ~ 5日(金) 12:30 ~ 13:00
場 所	F 工房
内 容	5月 23、24 の両日スタッフが参加した「ファシリテーション・フォーラム 2009」で得た知識や技術の報告およびファシリテーションの学内への周知の場として企画された。学生、職員とも気軽に足を運んでもらえるように昼休みを利用し、30 分というミニサイズで実施した。各日のプログラムは以下のとおり。 1日(月)「ファシリテーションの効能とツボ」(北村) 2日(火)「フィンランドメソッドの肝とは?」(鬼塚) 3日(水)「ファシリテーションの気持ち良さ」(棚原) 4日(木)「ファシリテータは〇〇〇」(久保田) *都合により中止 5日(金)「F 中の蛙、日本海を知る」(中西)
参加者	43 名(5日間のべ人数)
成 果	それぞれの個性を活かした手作りのフリップを駆使し、参加者との掛け合いも楽しみながら気軽な雰囲気でも実施できた。

■ファシリテーション研修合宿

知恵袋 道具箱 作業場



日時	9月9日(水)～10日(木)
場所	松の浦セミナーハウス
内容	<p>ファシリテータの養成及びファシリテーションへの理解促進を目的に、ファシリテーションの基礎的手法のひとつである「チームビルディング」を中心とした体験型研修を実施した。</p> <p>(1日目)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松の浦クエスト (P.40 参照) <p>「指令書」に書かれた内容に従って、課題解決(自己紹介、クイズ、周辺の観察など)をしながら散策することで、グループメンバーの交流促進と協調性向上をめざしたゲーム。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレイク実践 <p>既存のアイスブレイクを抽選で選び、チームごとにアレンジを加え、それを他のチームメンバーに対して実践する。</p> <p>(2日目)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フェルミ推定 <p>実際には測定が困難な量的問題に対して、既存の情報などを手がかりにして、解答を導き出すワークをグループ単位で実施。</p>
参加者	16名(教職員7名、学生8名、外部1名)
成果	<p>宿泊を伴う研修で、ファシリテーションの実践について時間をかけた検証を行なうことができ、実践力を身につけることができた。また同時にF工房にかかわるメンバーどうしの交流を深めることができ、ファシリテーションとF工房に関する意見交換を通じて、秋学期以降の活動方針に対する示唆を得た。</p>

■ファシリテーション研究会・第8回ファシリテータ研修会

知恵袋 道具箱 作業場



日時	9月14日(月) 10:00～12:00(ファシリテーション研究会)、13:00～16:30(第8回ファシリテータ研修会)
場所	本学12号館 12201教室
内容	<p>キャリア形成支援科目(キャリア・Re-デザインI、キャリア・デザイン基礎、キャリア・デザイン応用)担当教員、職員ファシリテータ、学生ファシリテータ、外部協力ファシリテータの養成とブラッシュアップを目的に実施する。</p>
参加者	23名(ファシリテーション研究会)、19名(第8回ファシリテータ研修会)(一部参加者含む)
内容	<p>(ファシリテーション研究会)</p> <p>ユング派の分析家であり、図画療法の専門家である入野美香氏(入野分析プラクシス代表)を講師に迎え、絵を描くことの心理学における意味、こころと絵の関係、現代人のこころと絵を描くことの意味、そのことが抱えるリスク、について学んだ。</p> <p>(ファシリテータ研修会)</p> <p>入野氏のスーパーバイズのもと、「キャリア・Re-デザインI」の導入として実施されているアートコミュニケーション・プログラムを実施。終了後、プログラムの効果、リスクについてディスカッションを行った。(巻末カラーページ参照)</p>
成果	<p>アートコミュニケーション・プログラムの意義と潜在するリスクについて理解を深め、ファシリテータとしてのかかわり方について示唆を得た。</p>

■ミニイベント「ふせんの達人をめざそう!!」

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	10月13日(火) 12:30-13:10、15日(木) 13:10-13:50
場 所	F 工房
内 容	ファシリテーションの基本的技術である意見集約のためのツールである「付箋紙」の使い方について、さまざまなサイズの付箋紙や筆記具を使って、書き込みや意見集約および整理の実習を行なった。
参加者	8名(合計のべ人数)
成 果	実際に手を動かして学ぶことにより、筆記具や付箋紙の特性を体感することができた。効果がすぐに見えるため、ファシリテーション技術の入門として取り組みやすい印象を得た。

■ミニイベント「ファシリテーションのいろは」

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	10月20日(火) 12:30～13:10、22日(木) 13:10～13:50
場 所	F 工房
内 容	ファシリテーション入門者を対象に、座る位置や視線の高さ、発言を促す声のかけ方など、ファシリテータとしての基本的な振舞いを体験。後半には参加者が5分ずつ持ち回りで、用意された「お題」でメンバー内での会議運営を試みた。(P.42 参照)
参加者	11名(合計のべ人数)
成 果	通常の研修では扱わない、ファシリテーションの「超」入門に特化した内容としたが、5分という短い時間設定は、集中してテンポよくワークをこなせるため、今後の活用が期待できる。

■ Cinema & Talk Session “Sing for Darfur”

知恵袋 道具箱 作業場



日時	10月26日(月) 17:00～20:00
場所	本学5号館 5321教室
内容	本学学生による団体「広告研究会」との共催。 スーダン・ダルフール州での紛争による犠牲者の救済のためのコンサート「Sing for Darfur」をモチーフに、さまざまな人のつながりをテーマにした映画を鑑賞し、その後小グループに分かれて、付箋紙を使ってそれぞれの感想を書き込み、模造紙にまとめて意見を共有、集約した。 運営の中心となる広告研究会の学生は、事前にファシリテーション研修として付箋紙の使い方などの実習を行ない、当日はファシリテータとして各グループの交流促進と意見集約にあたった。(巻末カラーページ参照)
参加者	25名(本学学生18名、本学教職員5名、他大学学生1名、他大学教員1名)
成果	「人とつながる」ということがテーマの映画の本質を、ファシリテーションが上手く活用できた事例であった。元々映画鑑賞が主な目的で参加した人にもファシリテーションの醍醐味を知ってもらう機会とすることができ、ファシリテーションに直接興味をもっていない層への訴求効果があった。当日は、Sing for Darfurの映画配信にかかわっている大学教員や、他大学の学生も参加し、課外活動や学外機関との連携の可能性も感じられた。

■ミニイベント「The Ice Break シリーズ」

知恵袋 道具箱 作業場



日時	* The Ice Break I ～自己紹介編～ 11月16日(月) 12:30～13:00、18日(水) 13:10～13:50 * The Ice Break II ～すぐできる編～ 11月24日(火) 12:30～13:00、27日(金) 13:10～13:50 * The Ice Break III ～ウォーミングアップ編～ 11月30日(月) 12:30～13:00、12月3日(木) 13:10～13:50 * The Ice Break IV ～ひとまず総集編～ 12月8日(火) 12:30～13:00、10日(木) 13:10～13:50
場所	F工房道具箱、作業場他
内容	ファシリテーションの導入で用いられるアイスブレイクの手法を、場面や目的別に体験した。各回の内容は以下のとおり。 「The Ice Break I ～自己紹介編～」(P44参照) 「所属」と「名前」の紹介だけに留まらない、お互いを知る効果の高い自己紹介の方法を紹介。 「The Ice Break II～すぐできる編～」 簡単な準備だけですぐに実践できるアイスブレイクを紹介し体験するとともに、その場で参加者による実習を行なった。 「The Ice Break III ～ウォーミングアップ編～」 会議や議論等の本題に入る前に、そのウォーミングアップとなるようなアイスブレイクを紹介し、各回1ワークずつ体験した。 「The Ice Break IV ～ひとまず総集編～」 今まで紹介しきれなかったアイスブレイクを紹介し、参加者のリクエストおよび担当者が推奨するアイスブレイクを全員で体験した。(巻末カラーページ参照)
参加者	54名(合計のべ人数)
成果	ファシリテーションの技法の一つである「アイスブレイク」を体験し、参加者が各々のフィールドにおいて実施できる契機となった。また回数を多く設定したことで、参加者どうしの交流も活発に行なわれた。

■ミニイベント「ファシリテーション・グラフィック(入門編)」

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	12月14日(月) 12:30～13:00、17日(木) 13:10～13:50
場 所	F工房
内 容	会議などで出された意見やアイデアを整理しつつ書き留める技術である「ファシリテーション・グラフィック」の基本的な技法についての実習。今回は太字のマーカーを用いて、「いかに視認性よく訴求力のある表現ができるか」をテーマに実施した。
参加者	14名(合計のべ人数)
効果	ただ書くだけでなく、お互いに書いた文字を見せ合い、意見交換をすることで、「見せるための文字」を書くことに対する意識向上ができた。

■学生支援 GP 中間報告会「ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性」

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	2月27日(土) 13:00～16:00	
場 所	キャンパスプラザ京都 ホール	
内 容	当日の詳細は第2章 P.49～参照。チラシは P.38 参照。 F工房スタッフおよび学生ファシリテータ(公募)で実行委員会を組織し、プログラムの決定や内容に関する協議を行なった。当日は学生も運営に参画し、第3部ではファシリテータを担当した。(巻末カラーページ参照) ◎実行委員会の実施日程	
	日 時	内 容
	12月21日(月) 12:30～	ファシリテータ顔合わせ、中間報告会趣旨説明
	1月13日(水) 17:00～	第3部(体験!ファシリテーション)テーマ選定
	1月19日(火) 12:30～	第3部運営方法協議・決定
	2月15日(月) 16:30～	会場設営デザイン協議・決定、当日役割分担
	2月22日(月) 16:30～	当日役割確認、第3部リハーサル(模擬ファシリテーション)
2月25日(木) 14:00～	全体の流れおよび役割確認、必要物品準備	
参加者	51名(本学学生6名、本学教職員19名、他大学学生1名、他大学教職員12名、その他13名)	
成 果	F工房のこの1年の活動成果と今後の可能性を学内外と共有できる機会とすることができた。特に、ファシリテーションの実践報告とファシリテータによる体験型プログラムは、当事者性が強く、リアリティをもって事業理念を参加者に伝えることができた。 また、ファシリテーションを実践する各団体や個人とのつながりもでき、外部評価など今後の事業連携の可能性を見ることができた。	

■第 9 回ファシリテータ研修会

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	3月4日(木) 10:00～16:30
場 所	本学12号館12322演習室
内 容	(有) 学匠代表梶谷氏を講師に迎え、「会議に役立つファシリテーション」をテーマにワークショップを実施。 (午前) 各グループでテーマを設定しての模擬会議運営と発表、振り返り討論 (午後) 「キャリア・Re-デザインI」合宿プログラムの検討をテーマに、午前と同じメンバー構成で会議運営、発表、振り返り討論(巻末カラーページ参照)
参加者	19名(学内15名、学外4名)
成 果	1日かけてじっくりとひとつのテーマに取り組むことで、参加者どうしの意見共有が図れた。またテーマ設定を「キャリア・Re-デザインI」にかかわる内容にしたことにより、同授業のプログラム改良にも寄与することができた。

II. 他部門との協働事業

1) 学内

学部教育（ゼミ運営）

協働者 佐々木利廣氏（経営学部教授）、2 年次ゼミ生

概要 2 年次のゼミ題材として、ハーフフィクションである「ファシリテーター蘇る組織」を取り扱ったことを契機に、ゼミでもファシリテーションを導入してみたいとの要望により実現。ゼミ生有志をファシリテータとし、研修から当日の運営補助、振り返りの一連の流れをコーディネートした。

■佐々木ゼミ（経営学部 ソーシャル・マネジメント学科）

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	*ファシリテータ研修 6月19日(月) 12:30～14:30 *ゼミ運営支援 7月9日(木)、16日(木) 15:00～16:30(4限) *オープンキャンパス参加 8月1日(土) 11:30～14:30
場 所	F 工房（ファシリテータ研修）、本学 5 号館 5223 演習室（ゼミ運営支援）、本学 5 号館 5302 教室
内 容	*ファシリテータ研修 有志 7 名がファシリテータとして参加。「対話の続け方（インタビュー技術）」、「ふせんの使い方」、「情報整理」の研修を実施。 *ゼミ運営支援 ファシリテータが運営するゼミに参加し、観察、助言、ゼミ終了後の振り返りを実施した。 7月9日はゼミの現状でのよいところ、悪いところを書き出し、「ゼミをよくするためには」というテーマで付箋紙を使った意見集約とディスカッションを行なった。16日は「佐々木ゼミの春と秋」と題し、前回の意見を活かした行動計画が話し合われ、教室の変更、情報共有のためのノート作成などの具体策が出された。 2回ともゼミ終了後に振り返りの機会をもち、相互評価や助言を行ない、ファシリテーションの効果や難しさについての意見共有を行なった。 *オープンキャンパス参加 オープンキャンパス経営学部紹介にて、ファシリテーションを導入したゼミの運営紹介のあと、F 工房事業について説明した。
成 果	大学教育において重要な位置を占めるゼミにおいて、「当事者参加と合意を促す」というファシリテーションの有効性を実証できる機会となった。また、ファシリテータの育成から評価までかかわったことで、ゼミ運営支援についてのモジュールを作成した。

学生寮（教育寮）

協働者 学生部（寮務担当）

概要 本学教育寮である追分寮（男子寮）、葵寮（女子寮）での人材育成と教育を目的に、学生部が主催する研修やイベントへの支援を実施。特に寮生をまとめる「班長」*に対する研修は1年間を通じて支援を行なった。

* 通常教育寮は1年次生のみが入居するが、希望者を募り、2年次生が班長として寮に残留して朝夕の点呼や生活指導、相談などの活動をする。

[寮生全体を対象としたプログラム]

■平成21年度 追分寮・葵寮合同サマーセミナー

知恵袋

道具箱

作業場



日時	8月3日(月) 10:00～23:00、4日(火) 9:00～11:00
場所	松の浦セミナーハウス
内容	追分寮、葵寮それぞれの班長有志による実行委員会を中心に企画を立案。プログラム・デザインと当日の運営を支援した。 当日プログラムは以下のとおり。 (1日目) ・アイスブレイク ・ワールドカフェ「充実した大学生活を送るための寮生活のあり方」 ・レクリエーション(湖岸にて宝探しゲーム、遊泳) (2日目) ・ワールドカフェのまとめ ・成果共有(川柳にして発表・審査)
成果	当日の運営主体を寮班長が担う体制を構築し、寮班長の自律促進の機会となった。

[平成 21 年度班長を対象としたプログラム]

■平成 21 年度 学生寮班長研修会

知恵袋 道具箱 作業場



日時	9月26日(土) 14:00～18:00
場所	神山研修室棟
内容	追分寮、葵寮の寮班長を対象に、3月の研修で立案した「マニフェスト」の中間評価（巻末カラーページ参照）と、「寮生でよかったと思うこと」「疑問に思うこと」「○○さん（他の班長）のいいところ」等テーマを設定したトークセッションを実施した。
成果	マニフェスト評価のプログラムを通じて、それぞれの研修に連続性をもたせ、長期にわたるかかわりのあり方について考える機会となった。また、日頃一緒に生活しているという環境の特性を活かすファシリテーションの手法についての示唆を得た。

■平成 21 年度 学生寮班長合同報告会

知恵袋 道具箱 作業場



日時	2月20日(土) 11:00～16:30
場所	本学5号館5301教室、他
内容	1年間の総括として、これまで実施した学生寮班長研修の成果が日課、寮行事、大学生活等の中でどう発揮されたのかを振り返り、その成果を平成22年度班長と寮務担当教職員に向けて発表した。F工房は当日のプログラムデザインおよび班長の発表資料作成を支援した。
成果	班長どうしのネットワークが十分に形成されており、発表は円滑に進行した。一方、発表手法に対外的な視点が不足しているなどの問題がみられたことで、ネットワーク形成の次のステップとなる達成課題支援の必要性が明確になった。

[平成22年度班長を対象としたプログラム]

■追分寮・葵寮新班長研修会

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	11月28日(土) 14:00～16:30
場 所	本学5号館5301教室、他
内 容	新班長(平成22年度)と現班長(平成21年度)の協働を通じて、新班長としての自覚を高め、リーダーシップを涵養することを目的に実施された。平成21年度班長有志4名がファシリテータとなって、事前に準備したアイスブレイクを実施。ファシリテータ以外の班長は、当日「新班長に伝えたいこと」を話し合い、アイスブレイクの後、寮ごとに発表を行った。F工房は事前打合せのサポートと当日の運営補助を行なった。
成 果	現班長がファシリテータとして、プログラムのデザインおよび当日の運営全体を行なったことにより、班長としてのロールモデルが新班長に提示された。また、二つの寮にまたがる、新班長と現班長間のネットワーク構築に寄与することができた。課題として、ファシリテータでない現班長の参加が十分デザインされなかった点、およびタイムマネジメントに関するフォローの不十分さが指摘された。

■平成22年度 学生寮新班長研修会

知恵袋 道具箱 作業場



日 時	3月17日(水) 13:30～17:00
場 所	本学5号館5221研修室
内 容	新班長としての新スタートとなる研修の後半部分、基礎的なファシリテーションの手法として、アイスブレイク「たこ(他己)インタビュー」およびチームビルディングのためのワークショップ「フェルミ推定」と「コンセンサスゲーム」を実施した。
成 果	研修本来のコンテンツである「寮班長としての意識の涵養」ではなく、アイスブレイクやチームビルディングといったファシリテーションの基本を実践する機会となった。プログラム自体は非常に盛り上がりのあるもので、あらためてファシリテーションの有効性を実証することができた。一方、これらの技術をどのように新班長に定着させてゆくことができるか、協働者である寮務担当者と協議を続けることが課題となった。

京都産業大学附属高等学校

協働者 学長室（連携推進担当）、京都産業大学附属高等学校（以下附属高校）

概要 本学では、高大連携推進のための接続プログラムを実施している。その中で、特に生徒間のコミュニケーション力やチームビルディングを促すプログラムに関して支援を行なった。

[附属高校からの進学者を対象としたプログラム]

■平成 20 年度ウォーミングアップ・セミナー * 振り返りイベント

知恵袋

道具箱

作業場

*ウォーミングアップ・セミナー…附属高校からの内部進学者を対象とした入学直前のプログラム

日時	12月16日(水) 13:00～15:00
場所	F 工房道具箱
内容	平成 21 年 3 月 19 日 (木) に実施した、ウォーミングアップ・セミナーに参加した附属高校出身の 1 年次生を対象に、9 か月間の大学生活を自己評価する機会を設け、ウォーミングアップ・セミナーの果たした役割と今後の大学生活についての展望を再考する契機とするため実施。当日参加者は 1 名だったため、参加学生と学生ファシリテータとの対話の時間とし、お互いの大学生活について語り合う場とした。
成果	参加学生と学生ファシリテータとのコミュニケーションを通じて、今後に繋がるネットワークが構築された。

■平成 21 年度 ウォーミングアップ・セミナー

知恵袋

道具箱

作業場



日時	3月9日(火) 10:30～16:30
場所	本学 5 号館 5303 教室、他
内容	大学生活にスムーズに入るためのオリエンテーションを、ロールプレイングゲーム形式で体験し、大学での履修システムや Semester 制のイメージを獲得してもらうためのゲーム「京産で GO !」を実施した。今年度は約 200 名の進学者が参加し、履修登録から部活・サークルなどへの参加、定期試験、さまざまなハプニング（インフルエンザの流行やモチベーションの低下など）を経ながら大学生活を疑似体験した。
成果	非常に大規模なプログラムであったが、学生ファシリテータが約 20 人参画し、それぞれの現場で能力を発揮してくれたこともあり、大きな混乱なく終了することができた。ファシリテータがほぼ 1 人で現場を担当することもあり、全体進行の把握や連絡系統などに不備もあり、コーディネートの強化が課題として残った。附属高校生にとっては、大学のシステムを把握する機会となった。

[附属高校在学学生を対象としたプログラム]

■「キャリア・デザイン」プレゼンテーション大会参観

知恵袋 道具箱 作業場

日時	1月29日(金) 13:30 ~ 15:15
場所	京都産業大学附属高校 聚英ホール
内容	附属高校3年生のキャリア支援プログラム「キャリア・デザイン」の最終報告・発表会を参観し、審査員を務めた。
成果	当日発表する生徒に対して前年度に実施した「本の一生」のワークショップ実施により、ファシリテーションを初めて体験した附属高校生徒および教員の1年後の成長を知る機会となった。

■高大連携授業「グループワーク・コンビニから見える世界」

知恵袋 道具箱 作業場



日時	2月1日、8日、15日、22日(いずれも月) 13:35 ~ 14:45
場所	本学12号館12502教室、他
内容	<p>日常生活に身近なコンビニエンスストアを題材に、産業構造を知り職業観を醸成することを目的に実施。(P.47 参照)</p> <p>*事前打合せ 1月14日(木) 附属高校にて教員との打合せを行ない、内容の共有と教員の役割について確認した。</p> <p>*学生ファシリテータ打合せとリハーサル 1月27日(水)、28日(木) ファシリテータ打合せと第1回プログラムをファシリテータ自身で体験。</p> <p>*第1回 全体オリエンテーション、グループワーク「コンビニにまつわる100のキーワード」 グループごとに、コンビニから連想されるものを100個列挙し、模造紙に書き出してアイデアを共有。時間のあるグループは出されたキーワードを集約、整理した。</p> <p>*第2回 クラスごとに分かれてグループワーク 前回出されたキーワードや、生徒の経験や興味などから1つのテーマを選定し、ディスカッションや調査を通じてそれぞれの「コンビニから見える世界」をまとめ、発表に向けて模造紙に書き出しをした。調査にあたっては、本学から仮ユーザーIDを発行し、学生または教職員の付き添いで学内のパソコンルームを使用できるようにした。</p> <p>*第3回 グループワーク、クラス内発表 前半はグループワークの続きを行ない、後半で成果発表をした。各クラスで1グループずつ、第4回の全体発表に進むグループを投票で選出し、その他発表内容などに応じてクラスごとに「賞」を決定した。</p> <p>*第4回 全体発表、講評、振り返り 各クラス選抜グループからの発表を学年全体で実施した。終了後各ファシリテータからの講評、クラスごとでの振り返りの時間もあった。</p>
成果	ふだん一方向からの授業に慣れている生徒にとって参加型の授業はほぼ初めてともいえるもので、反省点も含めて自主的な勉強の方法について知るきっかけとなった。また教員からも「受け持って1年近くがたつが、生徒の新たな一面をみることができた」とのコメントをいただき、連携プログラムの長所を活かすことができた。また、高校3年で実施する「キャリア・デザイン」の授業の導入としての位置づけが明確になった。一方、限られた時間の中でパソコンを使用することの是非や実施場所の選定など、運営面でいくつかの問題提起がなされた。

ピア・サポーター

- 協働者 教学センター（ピア・サポーター学生）
- 概要 学生どうしのフラットな関係性を活かしたアドバイジング・システムであるピア・サポーター制度を採用している大学の学生どうしの交流プログラムに参画、プログラム・デザインと当日の運営支援を行なった。

他大学のピア・サポーターとの交流プログラム

知恵袋 道具箱 作業場

日時	9月16日(水) 午後
内容	関西大学ピア・サポーターのメンバーが来学するにあたり、交流プログラムとして、学内を散策しながら京都産業大学についての知識と理解を深めるゲーム「産大クエスト」をピア・サポーターメンバー有志とともに開発。当日はゲームの一部として、課題ポイントにF工房を設定し、参加者にクイズを出題した。
成果	今回は他大学の学生に産大を知ってもらうことを主眼にしてゲームコンテンツを作成したが、今後内容を改変すればさまざまな対象者に向けて利用できるプログラムであることを実感した。

2) 学外

- 協働者 吹田市教育委員会 本学教職課程講座センター
- 概要 吹田市教育委員会と本学は平成 18 年 9 月より「連携協力に関する包括協定」を締結している。本年はその一環として F 工房がプログラム・デザインと当日の運営を行なった。

吹田市教職員キャリア研修

知恵袋 道具箱 作業場

日時	8月24日(月)
場所	吹田市立千里たけみ小学校
内容	千里たけみ小学校および竹見台中学校の教員を対象に、少数者の気持ちを体験するゲームを導入に用い、引き続き、障がいをもつ子ども・外国から来た子ども・難病で治療中の子どものいずれかをテーマにした「転校生歓迎プロジェクト」(学校および地域を知ってもらうための行事)を実施した。
成果	管理職、教諭、事務職員が参加し、職域を超えてそれぞれの特技や持ち味を活かしあうプログラムとなった。各グループにさまざまな職種・経験年数の教職員を振り分けて同じテーマで議論することで、フラットな雰囲気の中で合意形成がなされた。

Ⅲ. キャリア形成支援教育科目への参画

■キャリア・Re-デザインI（春・秋学期）

授業趣旨 モチベーションの低下により職業世界への移行に関して困難を抱える学生を主な対象とした科目。自己開示～自己概念の確立～社会への目線づくり～キャリア意識の再構築というプロセスをたどることで、受講生のモチベーション再発見とキャリア形成を支援する。

開講日 水曜日（不定期）13:15～16:30（3、4限）、合宿（1泊2日）

概要 授業担当ファシリテータとしてF工房スタッフがかかわったほか、授業全体のプログラム・デザインに参画した。各クラスの運営は担当ファシリテータの裁量により決定。

■キャリア・デザイン応用（春・秋学期）

授業趣旨 教室内にとどまらず、学外でのフィールドワークを通じて職業人の話を聞く機会を設け、ディスカッション、ディベート、グループワークを通し、自らの職業キャリアをより現実的かつ深化したかたちでデザインしていく授業。

開講日 水曜日（不定期）13:15～16:30（3、4限）、合宿（1泊2日）

概要 標記授業において、学生どうしのコミュニケーションを促すためのプログラムを立案、実施した。

初回授業アイスブレイク

内容 学年学部が異なる本授業受講生同士で、お互いの共通項を見つけ、学生どうしの交流を促すゲームを企画、実施した。

成果 本授業のためにデザインしたゲームを通して、授業開始時は低モチベーションの状態にあった受講生の参加意識を向上させ、その後の授業全体の円滑な運営に寄与することができた。

合宿ナイトプログラム

場所 松の浦セミナーハウス

内容 春学期は、スタッフと学生ファシリテータがそれぞれの大学生活を語るセッションを実施した。

秋学期はグループ対抗形式でコミュニケーションを促進するゲームを実施した。

成 果 春学期では、先輩学生のライフヒストリーを通じて、共感の姿勢を得ることができた。秋学期はレクリエーションの要素を強くしたプログラムを通じて、学生同士の交流を促進した。

■「自己発見と大学生活」(春学期)

授業趣旨 大学入学という人生の一つの節目をキャリアデザインへの大きなステップと捉え、大学生活、そしてその後の社会や仕事、働くことについて、グループワーク等を通じて受講生同士、担当教員と一緒に考える授業。1年次生対象。

開 講 日 毎週木曜日 15:00～16:30 (4限)

アイスブレイク

日 時 4月16日(木)

場 所 本学大教室棟515教室

内 容 学生どうしのネットワーク拡大およびクラス内のアイスブレイクのためのゲームを実施。

ゲストスピーカー

日 時 4月23日(木)

内 容 学生ファシリテータ3名が、授業のゲストスピーカーとして参加。大学生活での様々な出来事や学生ファシリテータとしての経験を先輩学生として発表。後半はフロアからの質問を受けながら進めた。

ワールドカフェ実施

日 時 6月25日(木)

内 容 ファシリテーションの技法のひとつ「ワールドカフェ」を用いて授業実施。

成 果 受講者からのアンケートによれば、「多様な価値観に触れることができた」という趣旨の評価が多数を占め、「ワールドカフェ」の有効性が示唆された。

■ 「O/OCF-PBL1」* (秋学期)

授業趣旨 企業等から提供された課題に取り組みながら社会人基礎力^(注)を育成していくためのコーオプ教育として展開される授業の第1ステップ。1年次から3年次まで3年間一貫してセットにして実施される。1年次生対象。

*On/Off Campus Fusion-Project Based Learning の略称。

(注)「社会人基礎力」とは、

経済産業省が定義した「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されている。

○合 宿

- | | |
|-----|---|
| 日 時 | 10月3日(土) |
| 場 所 | 奥琵琶湖マキノプリンスホテル |
| 内 容 | 合宿の最初に大人数でできるアイスブレイクを実施し、終了後グループを編成する部分までを運営。また、夜間実施の交流会において、そのプログラム・デザインにかかわり、ファシリテーションツールの提供と、当日の運営補助を行なった。 |
| 成 果 | 長期に渡る授業の最初の場面において、全体での親和的雰囲気を構築し、その後の合宿プログラムおよび授業への導入としての重要な役割を果たした。 |

■「大学生活と進路選択」(秋学期)

授業趣旨 自分自身と将来を考え、今だからこそ身に付けておくべきこと、考えておくべきことを取り上げ、それらの課題やテーマを、自らの問題として取り組み、自分の頭で考え、自分の言葉で語り、自分の意思で行動するための「訓練の場」としての授業。(2年次生対象)

開 講 日 毎週木曜日 15:00～16:30

場 所 本学1号館103教室

アイスブレイク

日 時 10月15日(木)

内 容 学生ファシリテータオリジナルのアイスブレイクツールを2種類実施した。

成 果 ネットワークが作りづらい大教室の授業において、受講生間のアイスブレイクとネットワークの創出を支援できた。

ワールドカフェ

日 時 1月7日(木)

内 容 ファシリテーションの技法の一つである「ワールドカフェ」を用いて、「何があれば大学生活は幸せになると思うか」をテーマとした対話の場を設定した。

成 果 大学生活の折り返し時点における個々の大学生活での経験とその想いを、同じ立場の多くの人と共有することで、各自のキャリアを考える場を提供できた。

IV. その他科目への参画

■「スターティングセミナー 2009」(文化学部初年次教育プログラム)

- 協働者 文化学部スターティングセミナー担当教員
- 日時 4月3日(金) 10:00～12:15
- 場所 本学11号館11306教室、他
- 内容 文化学部1回生全員(219名)を7つのクラスに分け、アイスブレイクを実施。その後、学部教育をめぐる在学生ボランティアおよび教員との質疑応答を経て文化学部生としてのアイデンティティ形成の支援を行なった。
- 成果 学生ファシリテータ開発のアイスブレイクツールが初対面の者どうしの交流促進にきわめて有効であることが確認された。

■「たのしく学ぶスペイン語」(共通教育科目)

- 協働者 全学共通教育外国語科目担当教員数名
- 日時 4月第1週
- 場所 本学12号館12301教室、他
- 内容 全学部を対象とした授業で、それぞれアイスブレイクゲームを実施。
- 成果 スターティングセミナーと同じアイスブレイクツールの実施により、効果を再確認できた。

■「コミュニケーション理論」(文化学部)

- 協働者 大河内泰樹(文化学部助教)
- 日時 春学期:5月8日(金)、秋学期:10月30日(金) 10:45～12:15(2限)
- 場所 本学11号館11304教室
- 内容 担当教員の開発したオリジナル言語ゲームの実施にあたり、運営とファシリテーションを担当した。
- 成果 担当教員のオリジナルゲームを支援するという協働の形を通じて、交流促進のためのゲームに新たな方向性を見出すことができた。

■「プレップセミナー」(法学部) (1)

- 協働者 岩本誠吾 (法学部教授)
- 日時 10月2日 (金) 10:45 ~ 12:15 (2限)
- 場所 本学4号館4E演習室
- 内容 初回授業にてクラス全体でのアイスブレイクを行なった後、F工房オリジナルのアイスブレイクツールを使用しての自己紹介を行ない、最後にグループを編成し次回以降の授業へのつながりとした。
- 成果 ゼミ形式授業における初回授業でのネットワーク作りを支援でき、次回以降の授業に繋がる土台が構築できた。

■「プレップセミナー」(法学部) (2)

- 協働者 久保秀雄 (法学部助教)
- 日時 11月27日 (金) 15:00 ~ 16:30 (4限)
- 場所 本学4号館4A演習室
- 内容 担当教員よりニーズを聞き、それを元にプログラムをデザイン。当日はグループ内で合意形成のもと正解をめざすゲームを実施。
- 成果 グループの活性化という目標はある程度達成されたが、メンバーの背景に多様性が乏しく、それぞれがもっている情報が均質になる傾向があり、ゲームそのものの持ち味を活かしきれなかった。対象者に応じて適切なプログラムを用いることの必要性がわかった。

■「法学部演習 (久保先生)」

- 協働者 久保秀雄 (法学部助教)
- 日時 12月8日 (火)、15日 (火) 9:00 ~ 10:30
- 内容 ゼミの雰囲気を知るため、実施の前週に授業を見学し、プログラムを立案した。1回目はアイスブレイクとチームビルディングのためのワークショップを実施し、メンバーの発話を促進。2回目は裁判外紛争解決というゼミの専門性を活かし、身近なもめごと (同じアパートに下宿する学生どうしのトラブル) をテーマに模擬仲裁を立案、当日の運営を支援した。
- 成果 仲裁という手続きがファシリテーションと通底することもあり、学生自身のファシリテータの経験がゼミで扱う内容の理解を深めることに役立った。授業によってファシリテーションになじみやすいものがあることがわかり、F工房からの事業提案の重要な示唆となった。

V. 広報活動

[メディアでの紹介]

■京都産業大学新聞 (第188号)



日時 6月1～5日 (取材)、7月27日 (掲載)

内容 本学の新聞局が発行する京都産業大学新聞に、6月1日～5日にかけて実施された主催事業の記事が掲載された。

■京都産業大学ガイド 2009.07～2010.06

日時 7月初旬 (掲載)

内容 総務部広報室が学外向けに年1回発行している京都産業大学ガイドの特集としてF工房開設の記事が掲載された。



■ F 工房広報用リーフレットの作成



日 時 7月下旬作成

内 容 F 工房に対する理解を深め、利用を促進することを目的に A4・4 ページ・フルカラーのリーフレットを 2,000 部作成。8 月初旬のオープンキャンパス以降、順次配布した。(P.36 ~ P.37 参照)

■ 京都産業大学キャンスマガジン「サギタリウス」VOL.45 2009 OCT.



日 時 9月24日(木)(発行)

内 容 総務部広報室が発行する学内向けフリーペーパー「サギタリウス」にファシリテーションについての解説や学内での利用例、F 工房事業案内が掲載された。

■京産大「やった・学んだ・これからの私」出演（京都三条ラジオカフェ）

日 時 8月12日、26日、9月9日（いずれも水） 21:00～21:15（いずれも放送日）

場 所 京都三条ラジオカフェ

内 容 *第1回「ファシリテーションとは、その効用」

F工房スタッフが出演し、ファシリテーションについての概要とF工房の事業説明を行なった。

*第2回「学生寮での実践」

F工房スタッフ、学生寮班長2名が出演し、学生寮とF工房のかかわりについて話した。

*第3回「ゼミでの実践」

F工房スタッフ、経営学部ゼミ生2名が出演し、ファシリテータを体験しての思いや学んだこと、今後にどう活かしたいか等について語った。

■京都産業大学ホームページ「キャンパスフラッシュ」

日 時 12月10日（木）（掲載日）

内 容 本学のウェブページのニュース欄である「キャンパスフラッシュ」に、11月に実施したイベント「The Ice Break」の記事が掲載された。

成 果 ウェブという媒体に掲載されたことで不特定多数のユーザに活動を知ってもらう機会となった。

■F工房ウェブページ作成

日 時 12月～

内 容 F工房の事業概要の説明と事業の広報のためのサイトを大学ウェブページ内に設定。現在オープンに向けての作業中である。

[学内への事業紹介]

■法学部教授会

- 日 時 12月16日(水) 16:00～16:20
- 場 所 本学4号館 4E 演習室
- 内 容 次年度の法学部授業支援のための事業提案をプレゼンテーションした。また、ファシリテーションツールの体験として、短時間でできるアイスブレイクを行なった。
- 効 果 学部長よりの依頼であり、教育へのファシリテーションの導入に意欲的であった。また、教授会でのアイスブレイクは予想外の盛り上がりを見せ、図らずもファシリテーション技術の有効性を実感する機会となった。

[他大学等への事業紹介]

■佛教大学学術支援課

- 日時 6月18日(木) 14:00～15:00
- 場所 佛教大学(京都市北区)
- 内容 佛教大学で実施している学生支援GPの事業運営の参考とするため、F工場の事業内容のブリーフィングと意見交換を行なった。
- 成果 他大学でのF工場事業理解促進の機会となった。これを契機に佛教大学の担当職員が後日「キャリア・Re-デザインI」の授業参観のため来学し、F工場を訪問した。

■コネクションズおおさか(大阪市若者自立支援事業)

- 日時 10月14日(水)
- 場所 大阪市若者サポートステーション コネクションズおおさか(大阪市東淀川区)
- 内容 7月29日に参加したキャリアデザイン研究会 関西支部会のパネリストとして同施設の職員が登壇していたことから、さらなる情報交換のために訪問。F工場事業、特に「キャリア・Re-デザインI」のプログラムデザインについての説明を実施した。
- 成果 「コネクションズおおさか」が事業の対象としている層と「キャリア・Re-デザインI」の受講者層にいくつかの共通性があり、それぞれの事業での現状報告と意見交換を通じて、大学ならではの支援のあり方を検証する機会となった。所長の高崎氏はF工場事業について共感していただき、後日「キャリア・Re-デザインI」のプログラムのひとつである「社会人インタビュー」のインタビュイーとして授業運営に協力頂いた。

[講演]

■ 「現代若者のキャリア教育環境を考えるー京都産業大学の場合ー」

(平成 21 年度 京都産業大学 DAY)

- 日 時 9 月 20 日 (日)
- 場 所 ホテル金沢 (石川県金沢市)
- 内 容 北陸地域在住の現京都産業大学生の父母および卒業生に向け、本学におけるキャリア教育の現状を知っていただくため、その全体像を提示したうえで、ファシリテーションを活用したキャリア形成支援科目の実情を紹介、あわせてファシリテーションが自律的な成長を促進する有効なツールであることを説明した。
- 参加者 49 名
- 成 果 本学におけるキャリア教育の取り組みが具体的なリアリティを伴いつつ京都産業大学 DAY 参加者に伝えることができた。

■ 「主体的な学びへの取り組みーファシリテーションの有効性についてー」

(京都産業大学 第 5 回教育フォーラム『授業力向上のために』第 1 部講演)

- 日 時 3 月 13 日 (土)
- 場 所 キャンパスプラザ京都 第 3 講義室
- 内 容 ファシリテーションの理論的背景に言及したうえで、本学でのファシリテーションを活用したさまざまなプログラムを紹介した。最後に、支援型教育の有効なツールと位置づけたうえでキャリア教育以外の分野における可能性を提示した。第 3 部パネルディスカッション「算数科・数学科を中心とした教員研修モデルカリキュラムに取組んで」にパネリストとして参加した。
- 参加者 70 名
- 成 果 ファシリテーションを活用する支援型教育が幼稚園・小学校・中学校と年齢が上がるにつれて定着していない傾向にあり、高校と大学において最も定着していないという現実が浮き彫りになった。

VI. 研究会、研修会などへの参加

■ファシリテーションフォーラム 2009

- 日時 5月23日(土) 13:30～19:30、24日(日) 9:30～17:00
- 場所 東京国際交流館 プラザ平成
- 参加者 鬼塚、北村、中西(以上F工房)、久保田(キャリア教育研究開発センター)
- 内容 (特活)日本ファシリテーション協会が年1回主催する研修会に参加、それぞれに希望する分科会に分かれて受講した。
- 成果 ファシリテーションスキルの向上ができたとともに、さまざまな背景をもつ参加者との交流を通して多様なファシリテータの振舞いや技術を学ぶことができた。この研修で得られた成果は6月に実施したミニイベントでフィードバックした。

■ファシリテーション入門

- 日時 7月13日(月) 10:30～17:00
- 場所 きゅりあん(東京)
- 参加者 中西(F工房)、久保田(キャリア教育研究開発センター)
- 内容 ファシリテーションについての入門研修を実践型で学んだ。

■キャリアデザイン学会 関西支部研究会

- 日時 7月25日(土) 15:00～18:00
- 場所 追手門学院大阪城スクエア
- 参加者 北村(F工房)
- 内容 「キャリア支援におけるカウンセリングの実際」をテーマに、パネルディスカッションと意見交換が行われた。
- 成果 他大学でのキャリア教育実践に関する知見を得た。また、パネリストの1人とは個別にコンタクトをとり、「キャリア・Re-デザインI」の授業運営の参考とすべく訪問を計画した(10月14日に実施)。

■教育ファシリテータ講座 [基礎編]

- 日 時 7月26日(日) 10:00～17:00
- 場 所 城北市民学習センター(大阪市)
- 参加者 岡田(F工房)
- 内 容 教育現場でのファシリテーション効果についての講義、ファシリテーションの基本知識・スキルについての講義ならびに実習を行なった。
- 成 果 事務職員が参加することで、ファシリテーションに関する理解が深まり、日常業務を行なう上で、今後の窓口対応への工夫やF工場の雰囲気づくりの醸成に役立った。

小括 ー平成21年度活動をふりかえってー

F工房が開設して1年、「ファシリテーションが効果的に用いられた教育プログラムは学生における個の活性化と自律に有効である」という、本学キャリア教育の中で培われた知見をもとにさまざまな事業を実施してきた。本項では、今年度の活動を分野別に整理し、成果と課題、および次年度の展望についての所感を述べたいと思う。

◎さまざまな部門との協働事業によるファシリテーションの普及推進

・実現できたプログラム

プログラム	協働した部署	学生支援の領域
附属高校2年生向けキャリア教育プログラム	学長室	高大連携によるキャリア教育
附属高校3年生向け入学前教育プログラム		
演習科目授業運営支援	科目担当教員	FD領域
共通外国語科目授業運営支援		
教育寮班長研修	学生部	教育寮支援
キャリア形成支援科目授業運営支援	キャリア教育研究開発センター	FD領域
新入生歓迎セミナー運営	文化学部	初年次教育

キャリア形成支援科目にとどまらない幅広い領域で協働事業を推進したといえるが、連携のもたらした成果に注目するとき、ひとつ重要な点が浮かび上がってくる。それは、協働先の部署と長期的にかかわり、ニーズの把握からプログラムの立案・執行・評価に至るプロセスを共有できたものほど、より豊かな成果をもたらしてくれたという実感である。ここでの「成果」には、プログラムに参加した学生の中から多くの学生ファシリテータが生まれているという好循環も含まれている。言い換えれば、情報の共有と活動の成果には正の相関関係があるといえる。もちろん、情報共有のためには相互に率直な意見を出し合い、それを尊重できるという組織の雰囲気づくりが必要である。今年度事業の協働先においても、そもそも組織内にそのような雰囲気が醸成されているか否かで、議論の効率に差が出てきたという感触を得ている。

・協働の提案はあったが実現には至らなかったプログラム

プログラム	連携すべき部署	学生支援の領域
「ピア・サポーター」オリエンテーション支援	教学センター	履修支援
留学生支援ボランティア育成プログラム	国際交流センター	留学生支援
ボランティアオリエンテーション・プログラム	ボランティア活動室	障がい者支援

これらはファシリテーションの有効性が示唆されながら、活動のタイミングなどが合致

せず実現することができなかった。現在 F 工房で活躍する学生ファシリテータのうち、それぞれの組織にも所属している者がおり、次年度での実現が期待される。

◎主催事業の定期的な運営によるファシリテータマインドの発信

報告にもあるとおり、基本的技術を中心としたファシリテーションスキルのトレーニングや、研修報告会を通じてファシリテータマインド発信の体制づくりはできた。しかし、広報体制などはまだ十分とはいえず、未だ F 工房は「知る人ぞ知る」状態である。現在、大学ウェブページ上に F 工房のサイトを構築中であり、サイトオープンによる状況の変化が予測される。

◎FD 領域での展開

FD 領域における今年度の成果は、ゼミ生がファシリテータとなってゼミ運営支援を行った経営学部のケース (P.11) であり、ここでも数か月に渡る協働体制が活きた。同じゼミからは既に次年度も協働をとのオファーがあり、さらにプログラムを練り上げることで、より使い勝手がよく、他のゼミにも転用可能なシステムが作れるのではないかと期待している。

さらに、授業支援の実践から、非常に重要な視座を得たので、ここに紹介しておきたい。それは、授業の扱うテーマ自体が「コミュニケーション」や「組織の活性化」などファシリテーションとなじむキーワードを含む場合、ファシリテーションは単にゼミや授業の雰囲気活性化するだけでなく、学んだ内容の実践者となれることでより理解が進むということである。例えば、裁判外紛争解決 (ADR) をテーマとしたゼミで、「もめごとを仲裁する」というロールプレイを通じて当事者間の合意を得るというワークショップを行なったが、問題解決のキーパーソンとなる仲裁人はまさにファシリテータであり、議論の場作りや意見聴取の方法など、必要なスキルを五感を使って「体得」できる機会を提供できたといえる。まだ実現例は少ないが、今後有効性が期待できる分野としては、公共政策、ソーシャルマネジメント、文化理解、教職関連科目など多岐にわたっている。

◎SD 領域での展開

SD 領域におけるファシリテーションの可能性については、中間報告会でも報告したように、キャリア形成支援科目への支援分野において、非常に参考となる実践例が生まれている。報告会の際に実施した参加者アンケートでも、「職員による実践が参考になり、エンパワーされた」という趣旨の反響が複数寄せられていることから、学内外でも潜在的な

ニーズはまだ多数あると思われる。しかし一方で、日常業務のなかでいかに研鑽の機会を確保するか、時間外に及んだ場合はどのような取扱いにするか等、実務的な問題も含め、職員の参画を向上させるために解決すべき課題は多数ある。これらの課題に対しては、他大学の実践例も参考にしながら、協働事業などでかかわる職員の声を受け止めることから取り組んでゆきたい。

このほど、平成23年度より大学での職業指導（キャリアガイダンス）を義務付ける省令改正が行なわれ、大学は高度の専門性に基づいた学問探究の場だけでなく、キャリア支援による学生の総合的な育成する場へと役割を拡大するというパラダイムの転換点を迎えようとしている。ファシリテーションスキルを活かした、教職員が一体となったより質の高い学生支援の実践はこういった意味からもまさに時代の要請に合致しているといえる。

F工房コーディネータ 北村広美

資料

■ F 工房オープンチャシ



ファシリテーションを学ぶ、 で変わる。

ファシリテーターマインドを育む、
「F工房」開設。

ファシリテーションを学生生活の
様々なシーンで活用してみませんか!

例えば、

- ゼミやサークル運営を活性化したい
- 仲間と一緒にボランティアなど
社会貢献活動を楽しく行いたい
- ファシリテーションを学びたい など

ちょっとマンネリ化してきた活動など
ファシリテーションを活用することで
今まで気付かなかったことや
見えていなかったことが鮮明に!

4/3 金 PM 2:00

OPEN

F工房:キャリア教育研究開発センター(1号館1階)

◆ F工房

Facilitator Mind

TEL.075-705-1963

ファシリテーション【facilitation】とは?
協働で物事を進めていくときに
人々の活動がスムーズに運ぶように支援したり
舵取りをするのがファシリテーションです。
この役割を担う人がファシリテーター【facilitator】です。

「F工房」は、
あなたのやる気を刺激する
ヒントを提供したいと考えています。
グループでも一人でも
気軽に「F工房」までご相談ください。

F工房は、みんなの“元気の出る場所”でありたいと思っています。

 POWER UNIV. 京都産業大学

■ F工房リーフレット（表面）

京都産業大学に ファシリテーション あります。 みんなの元気を 開発してます。

How to use "atelier F"

F工房では、学生、教員、職員などの立場に関係なく、「会議がうまくまとまらなくて困っている」「授業がマンネリ化していて、学生のノリが悪い。」

「サークルメンバーの結束をもっと固めたい」「ゼミ生の主体性を引き出して、もっと活発な議論をしたい」「仲間と一緒にボランティアなど社会貢献活動を楽しみたい」など、ファシリテーションの活用で効果が見込める様々な相談に対応しております。

「ファシリテーションってなんなのか、もっとよく知りたい」「実際にファシリテーターとして活躍してみたい」と思う仲間も募集しています。

ぜひ1号館1階の「F工房」までお越し下さい。






■ F 工房リーフレット (中面)

Mission・Vision・Action

Facilitator Mind を全学的に醸成・定着させる
「指導型」から「支援型」の教育環境の実現に向けて

“フアシリテーション”が創り出す場
Face to Face
Flat & Fair
Free & Fun
Forward
Forward

お互いの顔が見える
平等で公平な関係
自由な発言
率直な話し合い
前向きな姿勢
実りある成果

フアシリテーション活用の
F工房の現場

みんなの参加意識や納得を第一と考え、参加者の協働促進につとめる。
フアシリテータータマインドは、「ゼミや会議」、「サークル」や「ボランティア」などの
様々なグループ運営において、場の活性化と個々人の自律的行動を支えます。

＜フアシリテーターの現場＞
ラウンジ部の facere (悦ぶ、作用する) に like (しやす) という意味の前置詞を加えた facile の派生語です。
場の雰囲気づくりに
・場を定めてみる
・人と人とつなぐ
・顔を見合わせる
・活動の進行を促す
・場を定めてみる
・場を定めてみる
・場を定めてみる
・場を定めてみる

グループによる問題解決やアイデア創出、
合意形成、自己承認や自己理解など、様々な
知識創造活動を支援し促進していく保
前を担う人がフアシリテーターです。
京都産業大学では、フアシリテーション
の専任により、学生支援の取組の改善や
教職員との協力関係を「F工房」を基軸とし
て展開していきます。学務的に普及・定
着することで、学生主体の活性化と自
律行動が実現されます。

フアシリテーション比較図

活動形態	リーダーシップ	役割分担	参加者の役割
上位の役割	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
下位の役割	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション
活動の進行	フアシリテーション	フアシリテーション	フアシリテーション

作業場
教師、職員、学生の協働による
支援するワーキング
の立派な環境・評価

道具箱
学生による
学生のための
ツール開発の場

知恵袋
学生支援プログラムの
改善策づくりや企画立案

「F工房活動例」の説明項目

A...事例の概要
B...フアシリテーター担当者
C...概要・経緯や取組のねらい

CASE1 ゼミの運営支援
A...ゼミ委員/ B...ゼミメンバーの学生/
C...ゼミのテーマとしてフアシリテーション
を用いたゼミ活動、教員より相談されたのがきっかけ。
このゼミの活性化を図るとともに、学生の
フアシリテーションのスキル習得がねらい。

CASE2 フアシリテーション研修
A...教員、職員、学生、学外関係者/ B...学
外関係者、専門職員/ C...研修、職員のための
フアシリテーションスキル習得など目標達成目的
とした研修会、キャリア開発の授業の運営
研修を中心に年2回開催。

CASE3 通常講義の雰囲気づくり
A...学生/ B...学生フアシリテーター/ C...審
判の経験者/ D...学生/ E...審判
の人間関係づくりを目的としてフアシリテ
ーションを活用、F工房はアイスブレイク用の
ツールを提供。

CASE4 学生によるツールの開発
A...フアシリテーションに興味を持つ学生/
B...学生フアシリテーター/ C...アイスブレイ
クや自己紹介ツールなどに効果的だったカードやゲーム
を、学生自身の手で開発する場として、F工房
の「道具箱」を活用。

CASE5 キャリア Redesign
A...学生自身生活についている学生/ B...
専門職員/ C...学生/ D...学生フアシリテ
ーター/ E...学生生活の改善を目的として実
践、高校生のキャリア開発の場を目的に、
F工房や学生インキュベーションなどを実施。

CASE6 付属高校でのキャリア支援
A...高校/ B...専門職員、学生フアシリテ
ーター/ C...高校で学業の支援の一環として実
践、高校生のキャリア開発の場を目的に、
F工房を活用。

CASE7 寮班長のリーダーシップ研修
A...寮の班長になる学生/ B...専門職員、学
生フアシリテーター/ C...寮班長から研修を
受け、F工房を活用。研修終了後、寮班長
になる学生を対象に、F工房を活用しての研修
つくりを目的とした研修プログラムを開発。

■学生支援 GP 中間報告会チラシ

平成20年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」採択
「京産大発ファシリテータマインドの風」～ファシリテーションの定着による学生支援改革～



学生支援 GP 中間報告会

ファシリテーションがひらく 新しい大学の可能性

「支援型」教育環境の実現に向けて

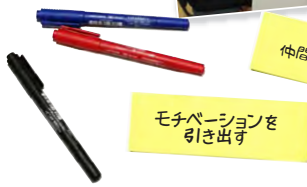
当事者の参加を促し満足度を高める手法「ファシリテーション」の発信の場である「F 工房」*が開設して1年、学内外のさまざまな現場でファシリテーションを実践してきました。この報告会では、さまざまな立場からF 工房の活動を顧みること、さらなる発展のためのステップにしたいと思います。最後には全員参加でファシリテーションを体験し、その醍醐味をともに味わう時間を共有しましょう。



仲間づくりの場面

プログラム

- I. 学生支援 GP 活動 概要説明 13:00～
鬼塚哲郎 京都産業大学文化学部教授 / F 工房事業統括
F 工房による活動の概要を説明します。
- II. ファシリテーションの具体的実践例紹介 13:40～
キャリア関連科目、寮班長研修、高大連携など、様々な領域で支援型プログラムに関わった学生・教職員から報告します。



パネルディスカッション

テーマ:「ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性」
筒井 洋一 京都精華大学教員・ワークショップ科目コーディネーター
芝原 浩美 特定非営利活動法人ユースビジョン/事務局長
ファシリテーションがもたらすインパクトを様々な視点から語り合い、教育環境の近未来図を描きます。



- III. 「体験！ファシリテーション」 15:15～
全員参加でグループワークを実際に体験します。



終了後に交流・懇談の場を設けております。

日時 **2010年2月27日(土)** 13:00～16:00
12:30 受付開始

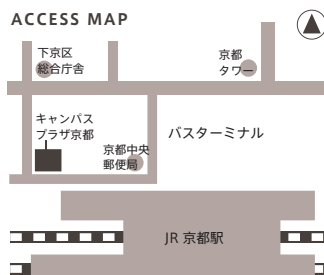
会場 **キャンパスプラザ京都 ホール(2階)**

京都市下京区西洞院通堀小路下 (JR 京都駅ビル駐車場西側)
JR 京都駅 (出口 C7) より徒歩約3分

参加費 **無料**

申込方法 **メールもしくは FAX にて申込受付** 裏面をご利用下さい。

申込締切 **2010年2月19日(金)**
定員(80名)になり次第締切となります。



■ 主催/申込問合せ先
京都産業大学 キャリア教育研究開発センター F 工房
〒603-8555 京都市北区上賀茂本山
TEL : 075-705-1963 内線 (2341) FAX : 075-705-1976
e-mail : ksu-f-acilitator@star.kyoto-su.ac.jp

* F 工房とは…キャリア教育を実践するなかでファシリテーションが学生支援の改革に有効なツールであることがわかってきました。そこで、ファシリテーションが学生支援の領域に広く普及していくための拠点として「F 工房」を学内に開設、学内の様々なニーズに応えるべく活動しています。

京都産業大学キャリア教育研究開発センター F 工房 行

平成 21 年度「学生支援 GP 中間報告会」参加申込書

2010 年 2 月 27 日 (土) キャンパスプラザ京都 ホールにて 参加費無料

参加者名	
1	(ふりがな) 氏 名
	所 属 職 名
2	(ふりがな) 氏 名
	所 属 職 名
3	(ふりがな) 氏 名
	所 属 職 名
連絡先	(ふりがな) 大学・企業・団体名 <hr/> 住 所：〒 <hr/> (ふりがな) 担当者名： <hr/> tel _____ fax _____ <hr/> e-mail _____

※交流会についての詳細は当日ご案内致します。

お申込先 FAX 番号：075-705-1976

京都産業大学 キャリア教育研究開発センター F 工房

メールでのお申込は — ksu-f-acilitator@star.kyoto-su.ac.jp

※メールタイトルは「学生支援 GP 中間報告会申込」として下さい。
氏名 (ふりがな)、所属・職名、連絡先を明記の上、お申込下さい。

申込締切 **2010 年 2 月 19 日 (金)**

※定員 (80 名) になり次第締切となりますのでお早めにお申込ください。

■松の浦クエスト指令書

F 工房合宿企画

MATSUNOURA QUEST

松の浦クエスト

松の浦セミナーハウス周辺に潜むさまざまな謎を解き明かす旅に出発しよう！
旅の途中、いろいろな指令やアイテムと出会います。チームメンバーの力を結集して、松の浦マスターを目指せ！

◎概要◎

指令を解決しながら、松の浦セミナーハウス周辺を散策します。制限時間は2時間（昼食時間を含む）。コースは自由です。

指令内容には、クイズ形式のもの、お互いの自己紹介が必要なもの、第三者の協力を必要とするものなどが含まれています。

◎目的◎

お互いを知り、活かしあう「チームビルディング」のマインドと技術を育てます。

◎ルール◎

- ・ガイドマップを参考に、指令をクリアしながらセミナーハウス周辺を散策します。
- ・2チーム対抗形式です。チームに1人、携帯メールでの連絡係を決めます（Softbankが安上がりなのでうれしい）。
- ・指令には、エリア全体を通して考える「全体指令」、ポイントごとに設定された「ポイント指令」、指令自体を探す「秘密の指令」の3種類があります。
- ・指令をクリアするごとに、携帯メールで連絡をしてください。・オペレータ側からも随時連絡をします。
- ・指令をクリアすると、それぞれポイントが加算されます。
- ・所要時間と獲得ポイントの総合評価で勝敗が決まります。

◎注意事項◎

体調に不安を感じたら、すみやかに連絡し、セミナーハウスに戻ってください。
一部歩道の狭い場所があります。交通に十分注意して通ってください。

【連絡先】

北村広美(F 工房)（電話番号、携帯メールアドレス）
中西勝彦(F 工房)（電話番号、携帯メールアドレス）

★出発準備★

チーム名を考えて送信テストを兼ねて、中西携帯に送信せよ！

★全体指令★

指令 1) セミナーハウス周辺にある果樹を探して撮影し、それらの名前をまとめて報告せよ！

3Pt×見つけた数

指令 2) 「松」または「浦」が名前に含まれる有名人を思いつくかぎり出し合い報告せよ！

1Pt×思いついた数

指令 3) 全員が写っている写真を撮って写メで報告せよ！

10Pt

指令 4) 湖西線を走る電車をできるだけ多くの種類撮影して報告せよ！

3Pt×撮影した数

★ポイント指令★ 各 5Pt

指令 1) 誤字のある看板を撮影して、正しい漢字とともにメール送信せよ！

指令 2) はしご車のナンバーを調査して報告せよ！

指令 3) 1. 木戸小学校の壁に書かれたスローガンを報告せよ！

2. 誰の銅像があるか報告せよ！

指令 4) 松の浦水泳場の管理人のおじさんから出されるクイズに解答せよ！

指令 5) 松の浦水泳場で、美しい琵琶湖の風景をバックに、1人1枚ずつ最高！のポートレート写真を撮影せよ！

★秘密の指令★ 各 10Pt

行ってからの楽しみ☆

■ファシリテーションのいろは実践コース

mini
ファシリテーション講座

30分で巡る

ファシリテーションのいろは 実践コース

作：北村広美(F工房)

ファシリテーションの効能 ファシリテータの役割

…今回は時間がないので配布資料を参照してください(@^)/^~
と、それだけではさすがに不親切なので、参考文献を紹介します。

堀 公俊 著『ファシリテーション入門』(日本経済新聞出版社、2004)
(F工房にお礼です)

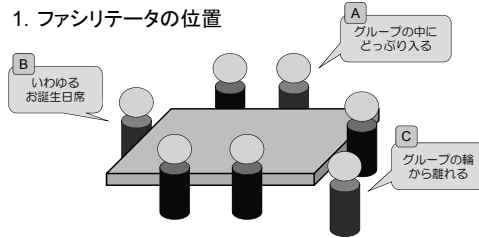
おもしろいサイトを見つけました！



<http://business.nifty.com/articles/facilitation/>

見ただ目から入る、ファシリテーションの「型」

1. ファシリテータの位置



A グループの中にどっぷり入る
B いわゆるお誕生日席
C グループの輪から離れる

初対面どうし	…A
立場が近い人	…B
先生と学生など	…C が雰囲気作りやすいようです

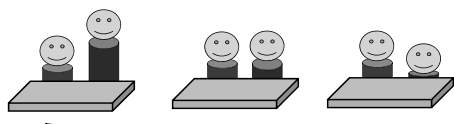
見ただ目から入る、ファシリテーションの「型」

2. 視線の高さ

①ファシリテータの視線が上

②同じ目の高さ

③むしろ視線が下



それぞれ、やってみた印象は？

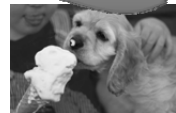
それぞれの視線のイメージ

①ファシリテータの視線が上
高圧的、指導的
あまり望ましくないとされるが、動きながらだとOK

②同じ目の高さ
フラット感、おちつき
ただし場を離れにくい

③むしろ視線が下
くだけた感じ
意外にモビリティは高い

場の雰囲気
臨機応変に対応してね！



超にわか仕込み！
発話を促す「魔法のコトバ」

とにかく「共感」を示すには

「へ～」「ふんふん」

「なるほど！」
 でシメる

「聞いた質問」
 (Yes, No, 三択など回答が限られている)

何でもいから声をききたいときには

発言した内容を深めるためには


「どんなところが？」

「具体的に
 は？」

「何かおもしろい
 エピソードはありますか？」

ファシリテータに求められる「ふるまい」

- 一、まず「聴く」
- 一、人の意見を否定しない
- 一、何か言われても根に持たない
- 一、みんなが参加できるように適宜話をふる
- 一、基本的には内容に立ち入らない、ただわかりにくいと感じたら説明を促す



話し合いにメリハリをつけるための「ワザ」
「拡散」と「収束」

とにかくいろいろな意見を出してもらおう

拡散
 (話をひろげる)

若干関係ないと思ってもある程度聞き流す

あまりにずれてきたら、「今のテーマは…」と介入する
 最初に**視覚的にテーマを掲示**することである程度防げる

出た意見をまとめる

収束
 (話をまとめる)

いくつかの**カテゴリ**に分ける
方向性を決める

収束を促すために、意見を書いておくとか劇的に結果が出る
 …**ファシリテーショングラフィック**(くわしくはまたいずれ)


ホワイトボードを利用する
 自分のノートに書き留めておく

**と、いろいろ話しましたが、
 習うより慣れろということ・・・**

ちょっとやってみましょう

5分間ファシリテーション
【お題】

- (A) 職場からの紅葉狩り、どこに行くか？
- (B) 宿題をいつも忘れてくるメンバーにどう対応するか？



やっけるうちに、場慣れして自分のペースができてきます！
 やいやすいようにカスタマイズしてくださいね！

WAO

今日はここまで！



■ The Ice Break

F工房定例イベント 11月ver.

The Ice Break I

～自己紹介編～

1

アイスブレイクとは？

- 会議やセミナーや体験学習でのグループワークなどの前に、初対面の参加者同士の抵抗感をなくすために行うコミュニケーション促進のための2人以上で行うグループワークの総称。【出典：ウィキペディア】
- メンバー同士がお互いのことを知り合い、打ち解け合うために使われるワーク。自己開示をするために必要な関係性を促進するためのアクティビティでもある。【出典：『チーム・ビルディング』（松公俊、加藤彰、加藤部真行）】
- 人と人のわたかまりを解いたり、話し合うきっかけを創ったりするためのちょっとしたゲームやクイズ、運動などのこと。初対面の場面だけではなく、ちょっとしたスポーツにおける柔軟体操のように、心をやわらかくして、会議などの席で人の話をよく聴く手助けにもなる。
【日本ファシリテーション協会HP：https://www.faj.or.jp/】
- 文字通り氷のように冷たくて硬い雰囲気を変えてアクティビティのこと。自由に意見を出し合えない雰囲気に対して、ゲーム的な要素を取り入れたチーム活動を行うことで、心と体の緊張をほぐそうというもの。
【『ファシリテーション入門』松公俊（日経文庫）】

2

ファシリテーションにおけるアイスブレイクって・・・!?

ファシリテーションとは、コンテンツには介入せずに、グループやチームでの作業を円滑に進めるために、そこに係るプロセスとネットワークを支援するスキルのこと。

↓

アイスブレイクは、ワークショップを始めるに当たっての導入部分で実施。氷のように固まった参加者の心と頭をして場の雰囲気を和ませ、ワークに参加しやすくすることが目的。

3

ファシリテータの役割

意見の発散 リアクション

意見の収束

場を統む アイสบレイク レイアウト設定

準備準備

プログラムデザイン 会場選定

観察 受容 全体の進行

フィードバック メンバー集め

コンセンサスを得る

他にもたくさんありますが・・・

4

アイスブレイクの種類

Categorized by Nakanishi

- ◆ 自己紹介系 → 今回ご紹介
- ◆ グループ分け系
- ◆ すぐできる系 → II でご紹介予定
- ◆ じっくり系
- ◆ 大人数系
- ◆ ウォーミングアップ系 → III でご紹介予定

5

自己紹介系アイスブレイク一覧

バズ	2人1組になって与えられたテーマに関して、自由に話し合う
チェックイン	1人1分程度で最近の身近な出来事や気になったことを発表し合う。テーマは何でも良いが、話しやすいものを選ぶ。
フリップ自己紹介	1人1枚の紙を配り、そこへ自分の名前と所属、100の3つくらいのテーマを提案し書いてもらう。各人はそれぞれに自己紹介していく。
漢字一文字	紙や付箋に今の気持ちを漢字一文字で表現してもらおう。それぞれにそれぞれが自己紹介を行う
ウソ？ホント？	各自が紙に4項目の自己紹介文を書きます。ただし、そのうち一つは全くのウソを書いておきます。グループ内でそれぞれが発表をし、他のメンバーはどれがウソかを当ててゲーム
Q&A	参加者に関心したい質問を各自が1～3時間分限りの裏に書き、前に貼っていく。自己紹介する人は、その中から1～3枚選んでその質問に答えていく。思いがけない、面白い回答はバズも出る。
しりとり自己紹介	全体がグループ単位になり、最初の人が名前→〇〇〇で自己紹介をする。次の人は名前+〇〇+△△で自己紹介をし、その次の人は名前+△△+□□で自己紹介をするといった具合で、前の人がした2つめの内容を次の人が真似していく
〇〇に例えると	自分を【色・乗り物・体の部分・車の部品・動物・電化製品】などに例えると何かを考えてもらい各自発表。
もじりんぐ	Facily's.com開発。説明省略。

参考文献 『チーム・ビルディング』（松公俊、加藤彰、加藤部真行）日本経済新聞出版社

6

体験してみましょ!!

体験ワーク①
フツアの自己紹介とペアでの自己紹介（バズ）との比較

体験ワーク②
フツアの自己紹介とアイスブレイク自己紹介との比較

体験ワーク③
アイスブレイクゲームを実際にやってみる

7

まとめ

- 実質的な自己紹介をすることが、アイスブレイクする第一歩となり、本題へとスムーズに入っていくキッカケとなる。ウワベだけの紹介では打ち解けられない・・・。
- 自らが進行役でなくとも、できることはある。
→ 自らが一工夫した自己紹介をする、グループ内オリジナル自己紹介をやるかと提案する、など。
- ファシリテータとして、その場の状況に応じたアイスブレイクをやってみましょ。フレキシブル最優先！
- 経験は重要。場数をこなせばアレンジも増える!!
- 「楽しい」＝「主体的」
参加者が楽しいと感じることは主体的に取り組んでいるサイン

8

■ウォーミングアップセミナー資料「京産で GO!!」概要

平成 21 年度 ウォーミングアップセミナー

大学生生活シミュレーションゲーム

「京産で GO!!」

F 工房

日時：平成 22 年 3 月 9 日（火）11:00～15:30

場所：京都産業大学 5 号館 他

目的：本ゲームは京都産業大学附属高等学校特別推薦入試を経て入学する附属高校 3 年生 197 名を対象に実施し、以下の 3 点を目的に行うものとする。

1. 大学における勉強およびそれに係る大学のシステムを体験し、各生徒の学問に対するモチベーションの再確認および発見を促す。
2. 大学生生活における多様な可能性や様々な出会いを疑似体験する中で、閉鎖的なネットワークに留まらない関係づくりや、大学生生活で多くの気づきや学びを得ることができるということを知る場を提供する。
3. ゲームのプロセスにおいて、グループメンバーとの関係を醸成すると共に、各々の考えの違いや大学に対する想いを分かち合いながら協働する。

概略：本ゲームは 3 人 1 組のグループとなり、各グループが 1 人の大学生になりきる。そして、ゲームの中で遭遇する様々な選択肢やイベント、ミッションをこなしながら、京都産業大学を卒業することをゴールに、大学生生活をシミュレートするものである。

大学の様々な教室や部署を実際に歩いて巡りながら、入学から履修登録、授業に課外活動、アルバイト、定期試験、そして就職活動など経て卒業するまでの流れを疑似体験する。

大学生生活を過ごす中で実際に起こり得る様々な事柄を「半分バーチャル／半分リアル」な体験を通して、実際の大学生生活を少しでもイメージしてもらいつつ、オリジナルの大学生生活を送っていくゲーム。

なお、本ゲームはコンテンツとプロセスの両面において、大学生生活での「出会い」を強く意識した内容となっている。また、ゲーム中に登場する名称やシステム等は京都産業大学の其れを完全には反映していないが、学生にとって重要と思われる点については、できる限り実際と近いものにするようにしている。

ゲーム中で登場する部署一覧

以下に記すのは、ゲームの中で出てくる部署です。ほとんどが実際に大学にある部署ですが、本物と区別をするためにあえて表記を変えてあります。()内が本来の部署です。

- ◆ キョーガクセンター（教学センター）→学生証発行、履修相談、履修登録
- ◆ ガクセー部（学生部）→奨学金支給、課外施設利用、サギタリウスチャレンジ
- ◆ キャリア・進路センター（キャリア教育研究開発センター+進路センター）
→各種資格、キャリア科目、インターンシップ、就職活動支援、就職フォーラム開催
- ◆ 課外活動センター（ボランティア活動室+入学センター+F工房など）
→ボラ活、ピアサポート、キャンスタ、ファシリテータなどの活動を案内・支援
- ◆ クラブ団体連盟→体育会・文化系クラブの勧誘と説明
- ◆ サークル団体連盟→各種サークルの勧誘と説明
- ◆ 定期試験運営部→定期試験の実施と採点
- ◆ 国際コーリユーセンター（国際交流センター）→留学についての説明、チューター統括
- ◆ ガクセーソーダン室（学生相談室）→学生からの様々な相談に対応
- ◆ ゲーム事務局→各イベント等の管理・運営。ゲームのシステム的支持。ゲーム統括

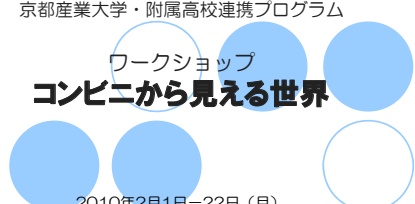
■高大連携プログラム「コンビニから見える世界」

POWER UNIV.

京都産業大学・附属高校連携プログラム

ワークショップ
コンビニから見える世界

2010年2月1日～22日(月)
京都産業大学 キャリア教育研究開発センター
F工房



みんな、コンビニに行ったことあるよね


- ちょっと聞かせてください
 - どのコンビニに行きますか?
 - いつ(どんなときに)行きますか?
 - 何をしに行きますか?
 - 誰と行きますか?
- 今回の連携プログラムは、そんな身近なコンビニをもう少し深く追究してみよう!というものです。

POWER UNIV.

なぜワークショップをやるのか?

- 大学の勉強のしかたをちょっと体験
 - 先生が一方向的に話すのではなく、自主的に参加する
 - 正解はひとつではない
- コンビニという身近なテーマ
 - どんなことでも勉強のタネになる


よど見はいいですね。〇〇。



POWER UNIV.

今日やること：ウォーミングアップ


- 「コンビニまつわる100のこと。」
 - コンビニといえば?思い浮かぶ単語や文を、グループで100個探し出そう!
 - できたら、クラス内で発表します。
 - それぞれのグループのちがいは、いかに…?



POWER UNIV.

来週以降は…

- 「コンビニから見える世界」
 - 今日発見した100のキーワードのうち、1つの分野に焦点をあてて、そこからわかることを調べてみよう!
 - 世界とは、地域・経済・職業などいろいろな切り口でOK
 - コンビニを「入口」に、社会のありかたを探す
 - 将来の自分も見えるかも…?
- 2月15日にクラス内で発表
- 2月22日に学年全体の前で発表(1クラス1グループ)



POWER UNIV.

ファシリテータの紹介

- 今回、各クラスに「ファシリテータ」がつきます
 - 先生ではありません。もちろん、生徒でもありません。
 - 答は教えてくれません。というか、ファシリテータ自身も適切な答を持っていません。
 - しかし、どうやってグループワークをすすめればよいかなど、相談にはのってくれます。
 - 担任の先生も、途中から「ファシリテータ」に変身するかも???
- 各クラスのファシリテータ
 - 大学職員(または教員)1~2名
 - 学生2~4名 ←大生生活のことも聞いちゃおう

POWER UNIV.

第 2 章 中間報告会報告

「ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性」

中間報告会概要

平成 21 年度 学生支援 GP 中間報告会
『ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性』
－「支援型」教育環境の実現に向けて－

概 要

趣 旨	F 工房を開設してから 1 年の間に実施してきた企画や他部署との連携プログラムを学内外に発信し、ファシリテーションの有効性が浸透し活用範囲が拡充することをはかる。また学内外の有識者と交流することで、事業評価の推進をはかる。
日 時	平成 22 年 2 月 27 日（土）13:00-16:00（12:30 受付開始）
会 場	キャンパスプラザ京都 ホール（京都市下京区西洞院通塩小路下る）
参加対象	教職員、学生、その他一般
参加費	無料
主 催	京都産業大学キャリア教育研究開発センター F 工房

参加者数

- ・ 報告会 77 名
(本学教職員・学生 25 名、学外教職員・その他 26 名、主催関係者 26 名)
- ・ 交流会 47 名
(本学教職員・学生 11 名、学外教職員・その他 10 名、主催関係者 26 名)

プログラム

総合司会 橋本正美 (キャリア教育研究開発センター・F 工房事業副統括)

開会挨拶 並松信久 (副学長)

□第 1 部 学生支援 GP 活動概要説明「F 工房この一年」

報告者 鬼塚哲郎 (F 工房事業統括)

□第 2 部 ファシリテーションの具体的実践例紹介

モデレータ 北村広美 (F 工房コーディネータ)

「ファシリテーション実践者による報告」

1. キャリア科目 (本学職員による実践)

報告者 井上晴美 (教学センター理学部担当)、高橋誠 (総務部)

2. 附属高校との連携プログラム

報告者 稲垣光穂 (経営学部)、辻村健治 (京都産業大学附属高等学校)、
橋本正美 (キャリア教育研究開発センター)

3. 学生寮 (教育寮) 班長

報告者 嶋田汀紗 (文化学部)、高橋明 (法学部)、三木瑛里子 (法学部)、
三宅卓也 (経営学部)

「パネルディスカッション：ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性」

パネリスト 赤澤清孝 (NPO 法人ユースビジョン)、筒井洋一 (京都精華大学)、
高橋誠 (総務部)、辻村健治 (京都産業大学附属高等学校)、
高橋明 (法学部・追分寮班長)

□第 3 部 「体験！ファシリテーション」(参加者全員によるグループディスカッション)

全体進行 中西勝彦 (F 工房サブコーディネータ)

ファシリテータ

荒木豊 (経済学部)、稲垣光穂 (経営学部)、井上晴美 (教学センター)、
釜場正起 (外国語学部)、鬼塚哲郎 (F 工房)、北村広美 (F 工房)、小西勇太 (法
学部)、高橋誠 (総務部)、野田勤 (経営学部)、橋本正美 (キャリア教育研
究開発センター)、三宅卓也 (経営学部)

閉会挨拶 若松正志 (キャリア教育研究開発センター長)

開会挨拶（並松副学長）

皆様、こんにちは。本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。本日は、「ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性」についての報告会ということでお集まりいただきました。学生支援 GP 採択事業で F 工房を開設しまして、「ファシリテーション」を学内に普及させ、展開しようとやってきました。開設して1年になりますが、徐々に学内に浸透してきているようです。

鬼塚先生をはじめ F 工房にかかわっていただいた皆さん、スタッフの皆さん、非常に熱心に取り組んでいただきまして、感謝している次第でございます。それから、もちろん、学外から F 工房にご理解、ご支援をいただきました皆さん方にこの場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

さて、さっきからファシリテーションと何回も言っておりますが、副学長はどれだけ理解しているかと言われますと、非常にぐとつまるものがございまして、「お前まだわかってないのか」と言われそうなんです、今日この場で挨拶をしなければならないということで、2～3日前から考えていました。直前まで話そうと思っていたのは、(オリンピックで)キムヨナさんと浅田真央さんは、なぜ金メダル、なぜ銀メダルかという話をしようと思っていたのですが、それよりもいいテーマはないかなと考えておりました。ファシリテーションをする人のこと、ファシリテータといえますけれども、日本の歴史上でファシリテータとして大きな役割を果たした人はいないかなということを考えていました。思い浮かびました。

NHK の大河ドラマを宣伝するわけではないですが、日本を代表する、あるいは日本で最高の、最大のファシリテータ、それは坂本龍馬ではないかという気がします。坂本龍馬は幼少期から何か気付き、最終的には何かを繋げていく。彼自身にそれ程力はないが、それぞれいろんなところに行って、人の能力を引き出す、あるいはどこかとどこかを結びつけて新しいことを生み出すということをやった。彼自身の最期は悲劇的でしたが、間違いなく新しい日本の礎を築いたことは確かなのです。

非常に大きな話になってしまいましたが、今日のテーマは「新しい大学の可能性」です。まさにみなさんがファシリテータになって頂いて、新しい大学の可能性を探っていただきたい、あるいは実行していただきたいと考えています。

おそらくこういうこじんまりとした報告会、と言うと失礼ですが、繋がりから徐々に大きな繋がりをもって、こういうことに気付いてくれる人が出てくるかと思います。どうぞ教育界の坂本龍馬になっていただいて、是非日本の大学教育を中心とした教育全体を変えていっていただきますようお願い致します。期待しておりますので、宜しくお願い致します。

第 1 部 鬼塚哲郎「F 工房この 1 年」

1. はじめに

京都産業大学は京都市の北部、上賀茂の山の中腹にあります、ワンキャンパスの私立総合大学で、開学当初より就職支援に力を入れておりますが、ここ 10 年ほど、それに加えてキャリア教育を立ち上げ、資源を投入しているところです。これとは別に、ワンキャンパスの特性を活かし、学部間の垣根を低くして、例えば経済学部の学部生が別の学部の専門科目を取れるというような、「融合教育カリキュラム」という仕組みをつくっています。

私たちにとってファシリテーションとは、「コンテンツ作りの協働作業において、プロセスを支援するスキル・技術・技法の総体」という風に定義づけたいと考えています。コンテンツ作りには直接関与せず、プロセスを支援していくものだと思います。それがきちりできると、当事者意識が醸成され、自律を育むという教育効果があるだろうと思います。ファシリテーションは NPO や企業でも使われていますが、私たちにとってのファシリテーションの柱は 3 つ、①場づくり、すなわちコミュニケーションが行われやすい環境を作ること、②ものづくり、つまり成果物作成を支援したりコミュニケーションツールを開発すること、③人づくり、すなわち①②を動かしていくことで、そこに関わる人たちの成長に繋げること、と考えています。教育機関ですので、学生の成長が目標になるわけです。私たちの大学ではこういう風にファシリテーションを落とし込んでいます。

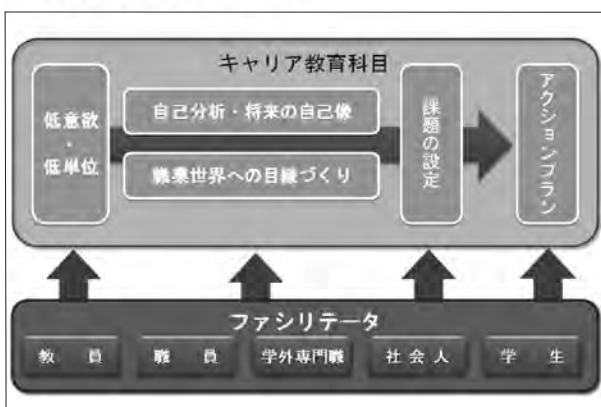
もう少し詳しくお話しすると、この 3 つの作り = 場づくり、ものづくり、人づくりができますと、フラットな関係、フラットと申しますと大学にはいろいろな立場の人間がいますが、教員・職員・学生・社会人、そういった立場の違いを超えたフラットな関係の中での小さな成功体験、これが有能感を醸成しているのだろうと考えています。ただ、それを一つの授業だけでやるのは、なかなか効果が難しい。学生個人の目線で考えれば、そういうことがいろんなところで起こらなければなかなか活性化・行動変容には繋がりにくいけれども、これが繰り返し起こるような環境を作ることができれば、学生の個としての活性化と自律に繋がるのではないかと思うわけです。そしてこのプロセスが繰り返し起こることを可能にするには、恒常的な活動拠点が必要ではないかと考えました。これが F 工房設立の経緯です。

2. F 工房設立の経緯と理念

開設に至る経緯をもう少し詳しくお話しすると、キャリア教育科目、京都産業大学でいえ

ばキャリア形成支援科目の中に、低意欲・低単位の学生を集めてキャリア教育のプログラムを提供していこうという「キャリア・Re-デザインI」という科目が一つあります。そこに来た学生は自己分析の作業と職業世界への目線づくり、この二つの作業を同時に進めていく。そして、それが終わった段階で自分の課題、今の自分に何が足り

F工房の設立の経緯と理念



ないかという課題を設定する。それをアクションプラン（改善案）に落とし込んで、クラスみんなの前で発表する、これを半期の1セメスターのプログラムにしています。これをどういう風に運営しているかといいますと、キャリア教育においては、コンテンツは学生たち自身が作るようにデザインされています。教員側が何かしらのコンテンツを持っていてそれをシステムティックに提供するのではなくて、キャリア教育のコンテンツは学生が自分たちで作るしかないという風に考えています。そうすると、授業を運営する側はコンテンツの提供ができないので、私たちはファシリテータに徹するしかない。いろんな人たち、教員・職員・学外専門職・社会人・学生ボランティアという5種類の人たちによって、コンテンツづくりのプロセスの支援をしていくというデザインになっているわけです。

ファシリテータたちが授業のあとで何をしたかと言いますと、毎回の授業のあと、20人くらいの人たちが集まって振り返りを始めました。きっかけは「これだけの人が集まっていて何もしないのはもったいない」と思ったからでした。始めてみますと、一つのコーオプ教育的な環境、つまり地域の学校・行政・企業・NPOが協力しながら若者を育てていく環境がここで作れたのではないかと思います。立場は教職員・学生・社会人と様々ですが、みんながフラットな関係の中で自分の感じていることを自由に発言し、それがプログラムの改善に繋がっていきました。PDCAサイクルが自然に出来上がり、このような場がF工房の原型になったと考えています。振り返りで解決できない課題は、半年に1回ファシリテータ研修を開催してそこで解決する形を取りました。そうしたプロセスのなかで、この授業での基本的なスタンスは「観察とフィー



観察するファシリテータ

ドバックのファシリテーション」であるという合意がすこしずつ形成されていきました。授業のデザインはかっちり決めてあるので、ファシリテータとして参加する人はグループワークをしている学生を観察し、介入の必要がない場合は介入しない。観察して後でフィードバックする。例えば「あなたはリーダーシップを発揮していましたね」と言うと学生はびっくりする。自分の持つ力を第三者から指摘されるという経験を持ったことがなく、この授業で初めて「自分はリーダーシップ的な行動ができるんだ」という気づきを得た学生たちと、私たちはたくさん出会っています。そして学生にそういったことが起きると有能感の形成に有効だということを実感しています。

もう一つ別の動きとして、学生が自分たちで合宿を企画し、その中でコミュニケーションツール、アイスブレイクに使えるツールなどを開発し始めたということがありました。最初のうちは誰でも思いつくようなものでしたが、2年くらいじっくり取り組むうちに洗練され、実際にいろんな場で使える漢字を使ったコミュニケーションツールといったものが開発されてきました。そういった開発プロセス自体も成長に繋がっていく、人づくり、ものづくり、場づくりに繋がっていく、そういったことになってきた。このような流れのなかで F 工房が構想され、学生支援 GP に採択されて実現したわけです。

F 工房の理念を図示しながら簡単に説明しますと、F 工房のスタッフは専門職 2 人、事務職 1 人、計 3 人で構成されています。これに加えプログラムによっては、学生ボランティアが参加しますが、彼らのことを私たちは「学生ファシリテータ」と呼んでいます。事業としては 3 つ、1 つは「知恵袋」と呼ばれるコンサルティング業務、いろんな部署、教員がファシリテーションを使ってみた



いというときに相談に乗る。2 つ目は「作業場」、実際にいろんなワークショップ、イベントを企画し運営する場です。3 つ目は「工具箱」、学生がコミュニケーションツールを開発する場です。これら三つは活動の柱でもあり、活動の場でもある。主な対象者は低単位・低意欲層の学生ですが、中間層・高意欲層も含めて学生にファシリテーション込みのプログラムを提供すると、学生個人の活性化と自律を促進することになるのではないかと

するとプログラムの対象となる学生層からニーズを汲み取ることができ、ボランティアとして働く学生も出てくるという好循環が生まれてくるのではないかと考えました。

3. F工房の本年度の活動

F工房の本年度の活動を見ていきます。最初はキャリア形成支援科目の合宿中のひとコマ。初対面でもアイスブレイクが起きつつある様子が見て取れます。

(ph.1)



ph.1

次は高大連携プログラム。附属高校のキャリア教育の一環で「コンビニから見える世界」というテーマでグループワークを運営したときのひとコマ。学生ファシリテータと高校生とのやりとりの場面です。(ph.2)



ph.2

次はゼミ支援の例。ビジネス小説をテーマに進めている経営学部のゼミから今年ファシリテーションを導入したいという申し入れがあったので、ゼミ生の中からファシリテータ希望者を集めてF工房でミニ研修をやり、この人たちが実際に授業でファシリテータとして授業を運営していく。私たちが授業で何かするのではなく、学生がファシリテータとしてやっていく、そういうプログラムを今年やりました。

(ph.3)



ph.3

次は教養語学の初回授業ですが、教養語学ですと、いろんな学部の人が集まってくるので、最初は凍りついたような雰囲気になることが多い。そこで1回目に学生が開発した自己紹介ツールを使って、1時間くらいかけて、いろんな人とコミュニケーションする中で、お互いのことを、名前を覚えたり、次に会うときに挨拶できるような環境を最初の授業で作る



教養語学の初回授業

ph.4

というプログラムです。来年以降はいろんな語学に広げていきたいと思ひます。(ph.4)

教育寮でのファシリテーション活動については、第 2 部で詳しく見たいと思ひます。それから半年に一度、ファシリテーション研究会・ファシリテータ研修会を開催しています。昨年 9 月にはキャリア形成支援科目に図画セラピー、今は「アートコミュニケーション」と呼ばれるプログラムを導入していますが、専門家をお呼びして、プログラムの持つ意味やリスクについて情報提供していただき、プログラムの改善を図る研修会を行いました。

ファシリテーションの役割をもう少し詳しく見ておきます。コンテンツを作るために場作りとプロセス支援がうまくかみあうとお互いの関係が促進され、最初は硬かった関係がほぐれていき、ラポール（親和的關係性）が形成されていく。ノリが生まれ、グループダイナミクスが働く。グループダイナミクスがいい方向に働くと、達成感が得られやすくなる。



達成感を繰り返していくうちに、自分がグループの中で一定の役割を果たしているんだという有能感が醸成される。それが活性化と自律に繋がっていくわけです。ファシリテーションがうまく機能すると、こういったことが参加者の中に起きていると考えられます。

4. F 工房のこれから

図 4-1 (P.58) は京都産業大学での学生支援の領域をあらわしたもので、手前に浮き出ている赤い部分が、本年度に F 工房が取り組んだプログラムです。学生支援という言葉は非常に曖昧ですが、私たちは正課と正課外の両方の領域で各部署と協働体制を築いていきたいと考えています。F 工房が開設して約 1 年経ちますが、ファシリテータマインドが全学に少しずつ広まっていると感じています。

F 工房の将来像ですが、図 4-2 新たに青で囲んである領域にも取り組みを広げてゆきたいと思ひています。教学センターのオリエンテーションは大規模なので大変ですが、こういったところにも広げてゆきたい。もちろん今年始めたことも継続してやっていきたいと思ひます。

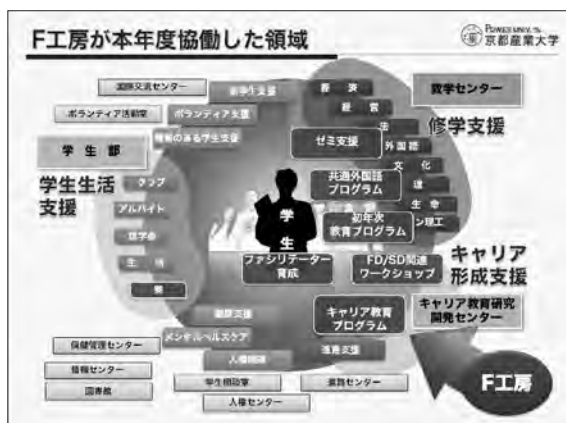


図 4-1



図 4-2

最後に、普及をどういう風に進めていくかですが、F工房の活動は学生支援領域だけでなく、FD（教員の能力開発）、SD（職員の能力開発）こういった部分との協働によって成り立っています。こうした幅広い領域にファシリテーションを普及させていくためには、地道に自分たちで市場を獲得していくことはもちろんですが、そうした草の根的な活動とは別に、大学の政策として推進していくことも必要になります。その一環として、学内にファシリテーション普及推進委員会が昨年12月に立ち上がりました。これは、大学が文科省に対して学生支援GPを推進しなければならないという責任を果たすため、また予算の出所は税金ですので国民に対して負っている責任を果たす意味でも、トップダウンで立ち上げたものです。この委員会を通じて、今まで手を付けていない部分にもファシリテーションが広がっていくことが期待されます。またその普及推進委員会の中から学内の評価委員会が立ち上がり、この一連のプロセスを評価していくことになっています。もう一つの評価機関として、学外評価委員会を作り、地域の第三者の視点から学内評価を評価してもらい、また地域の人から見た新たな提言をしていただく、というようなことを考えています。学外評価委員会は今日来られた方にもお願いしたいと考えております。参加してみたいという方がいらっしゃいましたら是非お声掛けください。ご清聴ありがとうございました。

第 2 部 ファシリテーションの具体的実践例紹介

◎ファシリテーション実践者からの報告

北村) 皆さんこんにちは。F 工房のコーディネータを務めております北村と申します。本日は休日にもかかわらずお越しいただき、ありがとうございます。

2 部では、今日の報告会のコア部分となる、ファシリテーションの実践について、3 つのグループから報告をしてもらいたいと思います。

是非皆さんに感じていただきたいのが、三者三様、報告者別のそれぞれのいろんな思いや体験、技術などです。F 工房ができて丸 1 年になりますが、まだまだ成長途上でございます。産大の「夜明け」を目指して、今日は全部で何人出てくるんでしょうか、10 人くらいだと思いますけども、たくさんの「サムライ(?)」、頑張っている人たちの生の声を是非聞いていただきたいと思います。

では、最初の報告者として、本学のキャリア形成支援科目であります「キャリア・Re-デザイン I」の職員ファシリテータを担当した、本学総務部の高橋誠さん、それから教学センター理学部担当の井上晴美さんの 2 名から報告をお願い致します。

1. キャリア形成支援科目

進 行：北村広美 (F 工房コーディネータ)

報 告：井上晴美 (教学センター理学部担当)

高橋誠 (総務部)

高橋) ただいまご紹介に与りました、京都産業大学総務部の高橋と申します。そして、隣が、同じく教学センターの井上でございます。よろしく願い致します。

授業といえば、通常ですと教員と学生が授業に参加する関係だと思うんですけど、この「キャリア・Re-デザイン I」の授業は、私ども職員が授業運営に



井上さん、高橋さん

参加するという方法がとられております。ここで「キャリア・Re-デザイン I」という授業の概要について説明させていただきますと、これは全学共通教育科目として誰でも参加できる授業でございます。半期、30 時間で 2 単位取得できます。授業は毎週行なわれるの

ではなく、月2回程度、2コマぶち抜きで実施されます。この授業の対象者は、先程申し上げておりました通り、大学での勉学に対するモチベーションが低い低単位の学生、低単位以外でもキャリア意識が低い、将来についてのビジョンがあまり見えていない学生、そして最後にキャリア意識はあるけれども、いざとなるとなかなか実行に移せない、そういう「何かすっきりしないもの」を抱えておる学生が中心です。

授業形態については、毎回グループワーク、そしてその発表を中心になされております。その中で教員、職員そして学生のファシリテータが、学生たちが取り組む課題を支えてゆくということを行なっておりました。

この授業の最終的な到達目標なんですけれど、ひとつには「支援型」で運営することによって、学生個人個人をエンパワーし、総合的な力を身に付けるということ、もうひとつは受講生間に仲間意識が生まれることによって相互作用が働き、キャリア形成に向けての行動を開始できるようにする、こういうことを目標にした授業でございます。

それでは、実際の取り組みの中から、今回は「社会人インタビュー」を取り上げさせていただきます。

「社会人インタビュー」は、様々な世界で活躍している方に対して、グループ単位で40分間の持ち時間でインタビューを実施するというプログラムです。インタビューに際しては、グループごとにどのように内容を組み立てて、どういう配置で、どのような形でインタビューの心の内面をひき出して、キャリア意識を確認し、エネルギーを感じ、最終的に自分たちがどういう風にキャリア意識を持つのか、といったことをみんなで考えていきます。インタビューの次の授業は振り返りを行なうのですが、単純に「前回のインタビューの話聞いてどう思いましたか」、「あなたはこれに伴ってどういう風に今から大学生活を送りますか」という形に持っていきますと、ストレートすぎてなかなか回答が得られにくいです。そこで私達は、「大喜利形式」を採用いたしました。説明しますと、ファシリテータが、インタビューを振り返る上での内容を散りばめた「お題」をフリップに書きます。それを提示し、学生が各自フリップに回答を書く、そしてその理由を説明することによって、インタビューの振り返りを可視化する、というちょっと変わった形式です。一例をあげてみます。「インタビューはどんな味がすると思いますか?」という質問に対して、「バーベキュー味」という回答が得られました。どういうことかと言いますと、「バーベ



「大喜利形式」による振り返り

キューというのはみんなで仲良く楽しむもので、この人とお話をするとみんなが輪になって盛り上がる、そういう環境を作ってくれる人であった」ということです。学生自身の感性が感じられる回答でした。

「お題」はインタビューに関するものからだんだん自分自身に関するものにシフトしていきます。この回は最後に、「自分の大学生活は何色ですか？」という質問をしましたところ、ある学生から「私は透明色です」という回答をもらいました。どういうことかと言いますと、「今まで後ろ向きに過ごしていた為に、自分の今までの大学生活に色は付かなかったんです。しかし、こういう形で同じような低単位の悩みを抱える者と出会って、少し色が付けられそうです。これから。今までは透明色でした」ということでした。

質問というのはストレートすぎると（答えるのが）難しい。大喜利という「オブラート」に包むことによって、学生の前向きな発言だけでなく、逆に辛い思いや不安、怒りとかなかなか表に出なかったものも、意外とスムーズに表現してくれたという印象です。一旦包むことによって、自分自身の悩みを捉えなおし、それを私達教員、職員、学生ファシリテータみんながそれを感じ取り、それが次回に繋がる。そして、学生同士も「そういう悩みを持っていたんだ」と内容を聞くことによって連帯意識を持つ、問題意識を共有する、こういう空間が作れたのではないかと私自身の中で感じています。

この中で私が感じたファシリテーションの深みというのを語らせていただきますと、やはりファシリテーションというのは基本の姿勢というのは傾聴なんですね。私達は学生よりは大人ですから意見を言ったり、主導するとかそういう形をとってしまいがちですが、耳を傾けるというのが大事なんです。それと同時に学生達の話を引き出すための仕掛けをどうつくるかによって、学生のプラス・マイナスの両面を引き出せるという深さを非常に感じておりました。今一見いいことを言っているんですけど、逆に働いたこともございまして、別の仕掛けを用意したんですが、わかりにくすぎて、学生が仕掛けの内容を理解する方に走ってしまって、結局回答を得るところか余計混乱してしまって、どんどん思いも冷めていくという失敗もしました。「仕掛けはいい」と言いましたけれども、事前の準備の大切さも実感しました。

さて、ここで職員としてファシリテータを経験したことをどういった形で活かしていくか、井上から報告させていただきます。

井上) 井上と申します。よろしく願いいたします。

今、高橋の方から「傾聴」ということがすごく大事だという話がありましたが、まさしく

私もそのように感じております。どうしても、職員は学生に対して「指導」という形から入ってしまうんですね。熱くなればなるほどガンガン指導の姿勢という形で学生に接してしまっていました。今回、ファシリテータとして授業に参加することによって、何かプラスアルファのものがあるんじゃないか、という風に考えるようになりました。毎回、ワークを伴う授業でありましたから、その中に学生との距離をどのようにとるのかということをしごく意識するようになりました。授業の方は先程高橋のほうから報告がありました通り、学生から感性豊かなユーモアに溢れた回答が飛び出すような工夫が毎回されておりまして、とても活気のある授業でした。

私が一番印象に残っているのは、最終回の授業です。内容は、「アクションプランー課題克服に向けての計画は何か」というテーマで学生自身が5分間のスピーチをするというものでした。学生は自由に5分間自分の発表をします。中には「これは内容的にはどうなのか？」というようなスピーチも中から飛び出してまいりました。そこで私は驚くべき現場を見ることになるのですが、授業を担当されていた北村先生は、淡々と授業を進めていくのです。学生のスピーチの内容にはその場では一切触れられないのです。今画面に出っていますが、コミュニケーションに関する工夫ということで「コメントシート」というものが出ています。これを使って、学生のスピーチに各々がコメントをします。そしてスピーチが終わった学生に手渡してフィードバックとします。発表した学生は、後でコメントシートを見て「こんな風に感じ取ってもらったんだ」というのを確認するというようになります。このコメントシートが、まさしくファシリテータの役目をしているんだという風を感じました。傾聴するのみの授業を見てきた私にとってはすごく新しい経験でした。学生に自由にさせていますが、決して放任しているのではないですよ、というまなざしや姿勢というものを教員やファシリテータの中から感じ取ることができました。



コメントシート

私はこの授業の中で、学生との「距離を置く」ということをしごく感じまして、「よい距離を置くこと＝話を聴く」ということがはっきりと見えてきました。この体験から私は学生との「距離感」を意識し始めました。関係を作る距離というのは当然目には見えませんが、数式で表したり、理論的に説明することができません。しかし、この距離を取る、言い換えれば距離を保つということにファシリテータとしての深みがあるように感じています。

そして今、現在の所属である理学部において未熟ながら今回の体験を活用してゆきたいと考えています。理系の学生は、専門の科目の兼ね合いや、こちらの思いと学生の意識の温度差で、キャリア形成支援科目の受講が少ないのが現状です。そこで、こういったセミナーの凝縮版を理学部生の学生支援行事の中に取り入れて、理学部生のコミュニケーションスキルの向上に取り組んでゆきたいと考えています。具体的には、今年の3月に実施する「在学生履修ガイダンス」で従来の内容を大幅に変えまして、各学年30分の時間枠を設け、「進路に関するモチベーションアップ講座」の開催を計画しています。これは各学年ごとに必要な情報を提供し、大学院や教職を含む進路選択、アクションプラン、教養講座を経て進路決定へ導くことを目的としたものです。また、新入生に関しては新入生オリエンテーションで教員と学生、また学科を越えた学生同士の関係を作っていける内容を企画しています。これは、理学部の2学科（注：物理科、数学科）を集めて、学生教員も集めて、各学科の教員に学生時代のお話を聞いたり、教員が大学時代にどんなことを考えていたのかというような質問をして、シンポジウム形式で教員と学生とのコミュニケーションをはかるという内容です。このように学生との距離を保つことの必要を認識しながら、まずはよい距離を作ることから始めてゆきたいと考えています。

高橋) 井上さんは理学部という、すぐ学生と触れ合えるという環境ですが、私は今総務部におります。普段学生と接することがなかなかないため、ファシリテータとしての経験をすぐ教育に活かされるかという、なかなか活かされない環境にあります。じゃあそんな環境の中でこの経験は終わるのか、というとそうではなく、じわじわ効かせていきたいなと思っていて、そこで、今職場で「誰にでも理解できるマニュアル作り」について、ファシリテーションを活用しております。総務部というところは、専任職員以上に契約職員・特定職員の方が多い環境にあります。専任職員はある程度業務の背景も分かっていますのですぐ作業できます。ただし契約職員の方は、現場に入ってこられてすぐに作業ができるかというなかなかできない環境にある。そのような方でも、すぐ作業ができるようなマニュアルを考えています。これをいかに作るのかを考えたときに、専任が作ったマニュアルより契約職員さんが考えたマニュアルの方が視点が深いんです。しかし今までの私の問いかけ方ではそういうマニュアル作りができなかったんです。「(契約職員の方が着任後すぐに作業にとりかかれるように) マニュアルを作りたいのでお願いします」というストレートな聞き方が悪かったのが原因だったということが、今回のファシリテーションを経験して分かったことです。具体的にどういう風な形で今改善したのかと言いますと、このマニュアルを作る上で、自分自身が「こう変えたいな」とか「こう疑問に思っている」

という点がある程度付箋に書いて、マニュアルに張っておくんです。その上で他の方に「今こういう形で改善を考えているんですけど皆さんどう思いますか？」という形で回していくんです。すでに意見が書いてあるので、意見を出すことに対する抵抗感がなくなるんです。あと、付箋に書いてある内容を見ることによって、新しく問題点への気づきというのが得られやすくなる。こういった形でみなさんにぺたぺたと付箋を貼ってもらって、その上で「じゃあどういう風に考えていこうか」「どう直していこうか」というのを話し合うと、非常にスムーズに意見が出て、前向きな発言が出て、マニュアルの改善に繋がったという経験をしました。実際の学生とのファシリテーション、モチベーションアップには繋がられていないんですけど、こういった形で、ファシリテーションを活かしながら、大学全体を盛り上げてゆけるように活用できたらいいなという風に考えております。以上でございます。

北村) 高橋さん、井上さん、ありがとうございました。

2. 附属高校との連携プログラム

進行：橋本正美 (F 工房事業副統括)

報告：辻村健治 (京都産業大学附属高等学校教頭)

稲垣光穂 (経営学部)



初回全体授業

橋本) 今年度の連携授業では、高校生に身近なコンビニエンスストアを取り上げ「コンビニから見える世界」をテーマに、大学の教室を使って2月1日から4回にわたり授業を進めました。昨年度は「本の一生」をテーマに、本にまつわる仕事、職業、物流などに視点をあて職業世界を探索しました。

今回の高大連携授業の流れを、1回目の全体授業で高校生に提示したパワーポイントを使い説明させていただきます。

この授業は、大学の学び方をちょっと体験すること、主体的にグループワークに参加すること、一つの答えを求めるものではないことを高校生に伝えました。



100のキーワード集めています

コンビニにまつわる「100のキーワードを集めてみよう」が初回授業の内容でした。私たちも事前に学生ファシリテータの皆さんと100のキーワードを集めてみましたが、授業計画で想定していた以上に時間がかかりました。でも、高校生は10分程で集め更にコンビニを見る視点となるキーワードを幾つかの要素ごとにまとめる作業を始めるグループも現れました。3回目の授業では、調べた内容を模造紙にまとめプレゼンテーションすることになります。授業には大学教員、大学職員、学生のファシリテータが各クラス

に4人から6人つきました。1回目の授業で生徒にはファシリテータの紹介の後、授業におけるファシリテータの役割を「先生ではありません。勿論、生徒でもありません」「答えは教えてくれません」「どうしなさい、こうしなさいは言いません」「どうやってグループワークを進めればよいのかなど、相談に乗ってくれますよ」と話しました。私たち、ファシリテータはコンテンツに介入しない、ファシリテータ自身一切適切な答えを持っていないというファシリテーションのスタンスで授業に臨みました。また、担任の先生も途中からファシリテータに変身するかも分かりませんよと生徒の皆さんに伝えましたが、教員にはこれがなかなか出来にくいですね。いつも何か喋っていないと落ち着かない「ああせい、こうせい」と指示したり、考え方に介入し、教師の期待する一つの答えに帰結すると「うん安心」「やったぜ、俺の言うこと分かったね」と言う風になるのです。教師は黙って見ているのが苦手です。後ほど、辻村先生から連携授業に関わられた高等学校の先生方の感想もお聞かせ頂ければと思います。授業では大学の職員、学生、授業を主に担当する大学の教員もファシリテータに徹する授業運営をしています。

ご覧いただいているスライドは、授業運営担当者打合せの風景です。F工房の「作業場」や教室で、授業の前後には必ず、「打合せ」「振り返り」を行いました。先ほど鬼塚の報告の中にも「振り返り」という言葉がありましたが、何かをやればそのことに対して、どうであったかを共有することは、小学校でも、中学校でも、高等学校でも大事な事だと思



F工房での打合せ風景

ます。授業風景をご覧ください。1日目、2日目、3日目。グループはおよそ6人で編成しています。4日目の全体プレゼンでは、クラスから選ばれた代表が各1グループ発表しています。全体発表の最後、学生ファシリテータからクラスごとにコメントを一言もらっています。これで、高大連携授業の概要説明を終わります。

この後、この授業に参加してみてどうであったかを辻村先生と稲垣さんから話していたかと思います。スピーチのコンテンツには私は全く介入しませんので、どんな話が出るか、私には全く分かりません。まず、稲垣さんから、よろしくお願いします。

稲垣) 京都産業大学経営学部3年次生の稲垣^{みほ}光穂です。今回のプログラムでは全4回すべての授業に参加し、学生ファシリテータとして活動しました。今回の活動で私のファシリテータとして課題となったのは高校生の集中力ということなのですね。と言うのも、みんな授業4回とも和やかな雰囲気です。リラックスして集中して取り組んでくれたのですが、いつも一緒にいるメンバーなので作業中と休み時間の気



辻村先生・稲垣さん

持ちの入れ替えの部分が少し弱かったかなと思いました。今回4時間しか授業時間が無かったので貴重な少ない時間でしなければ駄目なんですけども、授業以外の楽しい話に気持ちがいき、集中力が戻ってきませんでした。私も、ファシリテータとしてはあまり強く「作業に戻りなさい」と指示するのはNGなので「もうちょっとだから作業してみひん」と問いかけてみたんですけど、生徒から「今日はもう止めておく」とそんな言葉が返ってきて残念でした。これはファシリテータの能力とか、作業を面白く見せるとか、授業でのグループ編成をクラス自体ばらして、あまり話したことの無いメンバーで緊張感を持たせ、集中力をもっとあげさせる方法もあるのではと思いました。あと、今回の連携授業で生徒は「グループワークの能力を問われているのか」それとも「プレゼンテーションを仕上げればよいのか」が分からず、少し戸惑っていたように見受けました。このポイントではここをがんばってほしいという授業の課題が分かっていないところがあったと思います。学生ファシリテータ・高校の先生と、今回の授業に参加する生徒がコンセプトを共通理解しておけば、もっと生徒の成長に繋がったのではないかと思います。

橋本) では辻村先生どうぞ。

辻村) 私は、このような高大接続授業の高校でのトータルのコーディネータを務めております。今年は業務が忙しくて授業にファシリテータとしてべったり参加できなかったのですが、今の稲垣さんのお話も含めて高校教育全体の中でどの様に位置づけられF工房の皆さんと一緒にこういう連携授業をしているかという説明を先ずさせていただこうかなと思っております。3年前にできた京都産業大学の附属高校ですけれども、教育の柱の大きな一つとしてキャリア教育を打ち出しています。高校のキャリア教育というと普通に考えると進路を考える的なそういうものになるのが一般的ですが、今日の鬼塚先生の話から、すでに文脈が始まっておりますけれども、本校ではキャリア教育に対するとらえ方が違っております。基本的にはキャリア教育において生徒につけさせたい「させたい」がキャリア教育の理念に合わないかもしれませんが、生徒たちに育ててほしい力をいくつかメモに書き留めておりますが、それこそ本当に初歩で言いますと「相手の目を見て挨拶する」「相手の目を見て話をする」そこから始まっております。あと「グループで協働して何かをする力」「多くの人前で自分たちの考えたことを語る力」です。根底にあるものとして四番目にあげたいのですが、社会の一員であるという自覚、「社会参画意識」ですね。こういうものについて目を開いて欲しいと思っております。学校では、これらのことを総合して教員間では「人間力」と言っています。受験学力に対して勿論、相反する関係ではありませんけれども人間力を養っていく、附属高等学校のKSUコースの生徒は希望すればほとんど100パーセント京都産業大学に進学することが出来ます。そのような生徒たちにどのような力をつけさせるか、その方向性として考えている事柄です。今の中学生もそうですが益々アトム化していると言いますか、かつては自然に身に付いたのに、今は全く欠落している能力をつけていかなければいけないと思っております。実は今、稲垣さんにお話しいただいた4回の授業なのですが、2年生の最後2月に行う授業です。授業と言いますか接続授業です。実は本校では独自科目として高校3年生に「キャリアデザイン」という週2単位、2時間続きの通年のプログラムを実施しています。これは東京のある会社が開発したプログラムを本校で契約し利用しています。基本的に6社の協賛企業、森永製菓、日立、ダイワハウスさんなどがあり、クラスごとにそれぞれ自分の希望する企業に入社します。6グループを編成しまして、前半は企業活動の理解を深めながらバーチャルなインターンシップをインターネットを通じて行います。京都駅周辺で生徒たちは、「日立です」とアンケートをとったりする作業も致しました。学年の後半になりますと、まさにこの4回行った授業の拡大版ですね。各企業からミッションが出まして、それに対してグループワークをしながら一つの回答を作り上げていきます。そして最終的にプレゼンテーションの準備を残り半年をかけて行います。生徒たちは最後に学校内で発表大会を行います。そ

の前にクラスで代表を決めるプレゼンテーションを行います。最後に、本校のホールで発表大会を行います。学校長にも見ていただきながら2年生もそれを参観するという形でクラス代表6チームがプレゼンテーションを行い一席、二席を決め表彰するという流れになっています。この連携授業でお世話になった生徒たちは、ちょうどその3年生の1年間の総決算である校内のプレゼン大会のプレゼンテーションを参観し、3年の通年のプログラムに繋がっていく教育プログラム全体の中でF工房の皆さんのご協力をいただいて4回のミニ版連携授業プログラムを行う流れになっています。生徒にとっては3年生通年プログラムへの助走なんですけれども、我々附属高校教員にとってはファシリテーションとかファシリテータを考える研修と思っています。橋本先生もおっしゃいましたが教員は苦痛です。私も去年、ピッタリ入っていましたが、1回あたり70分の授業の間、生徒たちの活動をじっと見ている訳ですね。生徒たちが、若いお姉さん、お兄さんに囲まれてわいわいやっている姿を見ていて、こちらは教え込みしかしたことがない教員の^{さが}性、特にベテラン男性教員はどうしたらいいのか自分のアイデンティティの引き裂かれを経験するというような瞬間であったかと思っています。

私も稲垣さんと同じ感想を持っておりまして、彼ら生徒たちも明らかに戸惑っていて何を自分たちは求められているのか、自分たちは何をしているのかというということに対する方向性の見え無さ、これはある意味では今までの教育では受けたことの無いものを求められているからではないかと思います。目標設定をはっきり生徒たちにも理解させた上で授業に臨ませればよかったのかなあ……ただ、そうしてしまうことが一種のファシリテーションとしての間違いなのかなあ……そのことから考えていかなければならないのかなあ……というのが正直な感想です。ただ生徒たちにとっては大きな一歩で、私も稲垣さんにお話ししたのですが「失敗やったなと思っても構わない、そういう失敗体験を3年に繋げてくれれば」と思ったりしました。



全体プレゼン

橋本) ありがとうございます。稲垣さんから辻村先生にお返しいただくこともあったかと思いますが、お二人の意見を行き来していただく時間が私の不手際でとれませんでした。お許してください。北村が進行いたしますパネルディスカッションのなかでフロアの方から意見を頂き、いろいろな観点でお話いただければと思います。

これで終わります。辻村先生、稲垣さん、ありがとうございます。

3. 寮班長報告



中西) 私 F 工房のサブコーディネータの中西勝彦と申します。本日は本学教育寮の班長さん 4 名にお越し頂いております。最初に自己紹介をして頂きたいですが、それぞれが普通に自己紹介をするのはおもしろくないので、もうお互い分かりきっている仲でもありますので、それぞれを「他己紹介」して欲しいと思います。では、嶋田さんからどうぞ。

嶋田) はい。嶋田です。隣にいる高橋明くんは法学部なんですけど、F 工房から一部では「高ファシ」と呼ばれているファシリテータの申し子で、素晴らしい方です。

高橋) どうも。「高ファシ」…いや、高橋なんですけども、隣の三木瑛里子さんは同じ法学部で、非常に頭の切れる「女版コナン」みたいな感じです。

三木) 三木です。隣にいるのは三宅卓也くんです。葵寮では「たくちゃん」と呼ばれています。今流行りの癒し系草食系男子です。

三宅) ありがとうございます。三宅です。一周まわりまして最初の嶋田汀紗さんは文化学部です。通称「ツンデレラ」と今流行りのツンデレとシンデレラをかけた、粋なあだ名が付いております。以上です。

中西) はい。本日は以上の4名に発表して頂きたいと思います。F工房では、教育寮の班長さんの研修を、寮を担当している学生部の方と協働して、この1年間で3回行いました。その感想等を含めて、我々の発表はこういう形で話を進めたいと思います。

「寮のから騒ぎ」ということで、某番組のパロディでございますが、私菌も出ていなければ引き笑いもしませんけれども、進行をさせて頂きたい!とっております。(笑)では早速、最初のテーマの方に行きたいと思います。



THEME 「教育寮」 についての話

TOPIC 「追分寮 & 葵寮 = 教育寮」

三宅) 京都産業大学には教育寮と体育寮があります。そのうちの教育寮で、男子寮が「追分寮」、女子寮が「葵寮」となっています。この教育寮というのは、基本的に1年次しか入寮できません。その1年次が大学について何も分からないので、寮に入寮して共同生活を送る中で、大学生活とは何なのか、というのを学ぶのが教育寮となっております。で、僕たち班長というのは、その寮に残っている2年次なんです。2年次が残れるのはそれぞれの寮で12人だけになっています。その班長が1年次に対して履修登録やクラブサークルなど、大学生活の様々な事柄を伝えるということとなっております。



中西) なるほど。という教育寮の班長のみなさん、つまりみなさん2年次ですけども。そのみなさんに寮班長研修を行って参りました。では、続いてのテーマに行きましょう。

THEME 寮班長研修で印象的だったこと

TOPIC 「ぬんき」

寮班長研修で印象的だったことということで、全3回行いました寮班長研修で印象的だったことをお聞きしております。最初はこちら。

「ぬんき」これは…はい、高ファッションですね。

高橋) ま〜、「ぬんき」とはなんぞや、という話から始めないといけないんですが、これは我が京都産業大学の学章でありますサギタリウス(射手座)の星の名前です。これはアイスブレイクの



ゲームの一つなのですが、お互いの寮が初めて会う研修の時に、話がスムーズに進むようにということで、中西さん達に開発して頂いたアイスブレイクのゲームでございます。はい。

中西) そのアイスブレイクをするまで、お互いの寮同士はそんなに仲良くはなかったのですか？

高橋) 仲良くないこともないんですけど。まあ、お互い「手探り状態」ですね。

中西) なるほど。…手探り状態の中で「ぬんき」をやって、少しは…

高橋) もう、だいぶ仲良くなりましたね。アイスブレイクされました。

TOPIC 「大喜利トーク」

中西) なるほど。では、続いて印象的だったことは？

「大喜利トーク」これは誰でしょうか？

嶋田) はい。嶋田です。これは前期の振り返りとして夏休みの終わりにあった研修でやったんですけど、もうその頃にはさっき高橋くんも言っていた通り、みんなだいぶ仲良くなっていました。「大喜利トーク」とは、テーマに対しての答えを書き、それを基に話をするもので、例えばお互いが知らない良い所等を言い合ったり、前期までの班長としての点数が何点だったかを話したりしました。その時はみんな仲良くなっていたので、こんなこと言っているのか…っていうぐらいのことまで言い合いながら、ぶっちゃけ話が出たりとかして、すごく楽しかったです。



中西) なるほど。お互いの関係性が、その時点である程度出来ていたということですかね。その時には手探りの状態では…

嶋田) なかった…と、私は思いたいんですけど、他の方はどうだか分かりません。(笑)

TOPIC 「本当のチーム」

中西) なるほど。では続いて、寮班長研修で印象的だったこと。

「本当のチーム」…ということですが、これは誰でしょうか？

三木) はい。寮班長研修は年に3回あって、高橋くんが言った「探りあい状態だった研修」

と嶋田さんが言った「大喜利トークがあった研修」と、そして先週（2/20）に1年間の集大成として、班長の経験を発表するという研修をしました。その研修では、こういう風に発表してくれっていう指示が何もなかったんです。何を使ってもいいし、どんな形で発表しても構わないと言われたんです。（そんな状況の中）でも、みんなが自分の役割を担って、何も言わなくてもチームワークができたっていう。そういう意味で「本当のチーム」だったんじゃないかと思って挙げました。



THEME 班長としての自覚を感じた時

TOPIC 「新歓で前に立った時」

中西) なるほど。ではテーマを変えたいと思います。

班長としての自覚を感じた時ということ。この寮班長研修の目的の一つに「班長としての自覚」を身に付けることが設定されていました。ということで、班長さんに班長としての自覚を感じた時を聞いてみました。では、まず一つ目。

新歓で前に立った時ということですが、これは誰でしょうか？

三宅) はい、三宅です。これはそのまんまなんですけど、新入生歓迎会で、班長は新入寮生を歓迎するという意味で、パフォーマンスをやったりだとか、みんなでゲームをしたりするんです。そういうことをした時に、自覚をもったということです。まあそれまでも研修だったりとか、新入寮生が入ってきて色々教えてあげたりだとかはしたんですけど、その時はなんかぼんやりとした感じで班長やってただけでした。でも、新歓っていう実際に去年の班長さんがやってることを自分たちがやってるんだ、って思った時、初めて「班長になったんだ」、「責任を持ってやらないといけないんだ」と思いました。

TOPIC 「遺骨の取扱いについて聞かれた時」

中西) なるほど。では続いて。

遺骨の取扱いについて聞かれた時 これは誰でしょうか。あっ、三木さん。

三木) はい。寮は班に区切られていて、私の班は班員が17人いるんですが、私が法学部なので、その班員のほとんどは法学部になるんです。点呼が毎日22時10分にあるんですけど、その点呼の後に「ちょっとエリコさん。あの～、遺骨ってどう取り扱ったらいいですかね」って聞かれたんです。え～!? みたいな… (笑)。詳しいことはプライバシーに関わるので、この場では言えないですけど、そういう相談された時に「あ、自分班長なんやな～」って感じました。私、下に兄弟がいないので頼りにされると嬉しいんですよ。

中西) なるほど。頼りにされた時ってことですね。とても具体的な例を出して頂きました。(笑) では。続いて、テーマを変えます。

THEME 班長としての一年を振り返って

TOPIC 「濃」

班長としての1年を振り返ってということで、みなさんは3月10日をもって、班長としての役目を終えられ寮を出て行かれるわけなんですけど、班長としてのこの1年を振り返ってどうだったかということ聞いてみました。ではまず～、1人目。

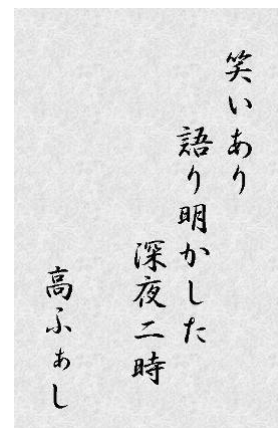
「濃」ということで、これは?…はい、嶋田さん

嶋田) (この字は) 私の出身地の一文字でもあるんです。岐阜県美濃市なんですけど、ま、そんなことはどうでもよくて。(笑) 「濃かった1年」ということで、さっきも言ったんですけど、研修でも普段の生活でもぶつかることが凄く多かったんです。高校卒業して大学生にもなって二十歳になろうっていう人たちが、ケンカしたり、本音で語り合ったりするとは思ってなかったんですけど、班長で共同生活をしながらそういうことが出来て、他の学生よりも濃かった1年を過ごせたと思います。たぶんこの1年のことをわたしは一生忘れないと思います。

TOPIC 「笑いあり語り明かした深夜二時」

中西) なるほど…。では続いて参りましょう。

高橋) 「笑いあり 語り明かした 深夜二時」ということで、どうもありがとうございます。川柳にしてみたんですけど、僕の班長としての1年を振り返って、まあ、深夜二時ってのは、深夜三時でも一時でも語り合わないから二時にしたってだけなんで。ただ夜遅くまで、班員の相談に乗ったりとか、班長同士で語り合ったりとか。風呂場であったり、自分の部屋であったり、食堂であったり、と色々な場所で笑い合い、語り合ったな～。という1年の思い出を川柳にしてみたというか。形になってますね。はい。



中西) 高橋くんはこれに際して、他にも色々な川柳を考えてらっしゃったようですが。

高橋) そうですね。川柳のプロですから。(笑) 他にもですね、班長さんに向けて「班長のみんなの活躍 金メダル」ってね、ちょっとバンクーバー(五輪)にかけてみました。あと、「マジ大変 終わってみれば マジ達成」みたいなラップ風の川柳も作ってみました。

中西) なるほど。川柳でまとめるというのは、寮班長のある種のトレンドというか。

高橋) そうですね。「五・七・五」にまとめる、非常に綺麗ですよ。美しいです。

中西) という形で、色々な活動とか成果を川柳にまとめるというのが、寮班長スタイルということで、最後はプロでもある「高ファシ」くん、川柳を作って頂きました。(笑)
ということで、発表をしてきたわけですが、この1年のF工房と寮班長との関わりは、決して多いものではありませんでした。ただその中でF工房として思ったのは、1年間の班長さんの成長がはっきりと見えたことです。我々は日々の寮班長の生活というのは見ることができないですが、要所で彼らと一緒に研修をやって、回を追うごとに彼らの成長を感じることができました。F工房は班長同士の関係性を深めるプロセスと、班長としての自覚を身に付けていくプロセスに関わった、という点で、寮班長研修にファシリテーションに関わったんじゃないかと思っています。

ということで、そろそろ時間がきたようなので、我々の報告を終わりたいと思います。ありがとうございました。



4. パネルディスカッション



北村) それでは引き続き、パネルディスカッション「ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性」に移りたいと思います。本日、ゲストを2名お招きしていますのでご紹介させていただきます。筒井洋一さん（京都精華大学）と、赤澤清孝さん（NPO 法人ユースビジョン）です。よろしくお願いいたします。パネリストは各報告者より、高橋誠さん、辻村健治先生、高橋明くんです。こういう場合、「先生」などと言うと力関係が出てきてしまうので、すべて名字に「～さん」でお呼びいたします。それでは、まずゲストのお二方から、ご自身の簡単な自己紹介と、発表をお聞きになった感想をお話ししていただきたいと思います。

筒井) 京都精華大学人文学部の筒井と申します。よろしくお願いいたします。もともと僕は法学部の大学院でドイツ政治、政治学を研究していました。90年の初めから富山大学にいて、そこで教養部がつぶれて、新しいカリキュラムを作ろうということで、大学1年生を対象に、日本語表現法「読み・書き・話す・調べる」の必修の授業を全学一斉に（5学部）やりました。その時の仕掛け人だったんです。日本語表現法は今では全国の大学の3分の2以上に波及していますけれども、それを一番最初にやったということです。（日本語の）専門家以外の人ややったところが特徴です。

今回の発表の感想ですが、「コンテンツ」と「手法」と「環境」ということでまとめてみたいと思います。かつての大学、知が独占していた時代は、教授法は基本的にティーチング（Teaching）でよかった。それが今の時代は、知が分散化・拡散化・多様化していて、手法としてはファシリテーション、コーチングなど、ティーチング以外の形での「正解は向こうにあるんだ」というような手法が必要になると感じています。「環境」としては絶えず外部との連携、オープンな形、社会人を入れる、職員の方が入る、先輩が入る、いろいろな人が入るというような形です。この3つの事例は、すべて知の分散、外部の人間を入れたファシ

リテーションですね。このあたりのところをそれぞれ取り入れていらっしゃるなど思いました。以上です。

赤澤) ユースビジョンの代表の赤澤と申します。ユースビジョンは、私が大学生の時代、1996年10月に設立した団体です。1995年、阪神淡路大震災がありまして、それを契機にここ京都でもたくさんの学生が被災地に参加しました。大学ではなかなかぱっとしなかった人も多いんですけども、現地では活動に参加して、そこで自分自身に有用感を感じたり、人と繋がる楽しさを覚えたり、社会と繋がりがいろいろなことを感じたり学んだりという、大学で得がなかったものを得る機会になって、社会に貢献するだけでなく「新しい学びの場」としてのボランティア活動というのが認識されたんじゃないかなと思っています。

当時はインターネット等もなかったですので、地域でどうやってボランティア活動に参加できるかという情報がなかなかない。そういった中で学生が必要とされている環境に繋がっていくための情報センターのようなものを作ろうということで、当時の学生有志で集まって始めたのが活動の原点です。今は学生の社会参加のパターンがボランティアだけではなくて、NPOへのインターンシップとか、あるいは社会起業など多様化していますので、ユースビジョンと名前を変えて活動をしています。

地域で課題解決に取り組む一員として参加していくためには、自分から参加し、学んでいくという姿勢も大事ですし、現場でもそれを受け入れる仕組みを作らないと意欲がある人を活かさないで、ワークショップ型で課題に気づいたり参加していくための仕掛けをしていくことが大事になってきます。ボランティア活動のような答がないことに参加していくためには、ファシリテータがともに問題を共有して解決策を考えていかないと、なかなか活動が進んでいかないと思います。

今日みなさんの発表を聞いて感じたことというのは、僕自身が大学生だった頃、大学では参加型、人と一緒に何かをするというような学び方がなかなかできなくて、個人が賢くなってどういう風に社会を乗り切っていくかというような学習の仕方や就職活動をしていたんです。そういった中で、15年前に情報センターの活動を始めたわけですけども、今日の報告を聞いて、大学というものが変わろうとしているんだなと感じております。大学の学生に対する見方・捉え方が「教育される客体」から「学ぶ主体」へと変わっているんだなと。問題を解決する力はそれぞれが持っているという認識に立って、その学ぶ力や問題を解決する力をどういう風に高めていくのか、あるいは他者と一緒に問題解決をしていくような力をどう高めていくのかと、そういう観点でこうしたプログラムが進められているのかなということを感じました。

北村) ありがとうございます。ではここで、報告者の方にお聞きしたいと思います。ファシリテーションがこんな効き方をしたという具体的なエピソードを簡単をお願いします。

高橋誠) 私は学生とはなかなか関わりを持たない環境にあるのですが、職員との間でどのように効いているのかについて話させていただきます。仕事をする上で（コミュニケーションの）邪魔をするもののナンバーワンが「身分」ですね。こういうものに対して、それを乗り越えるのは（個々の）コミュニケーションスキルのみだと考えていたんですが、ファシリテーションの体験から、能力だけではなく、考え方や手法によって関係性を築くやり方があると感じました。はじめ、ファシリテーションというのは難しいし意味も分からないし、どうしようという感じではあったんですが、ちょっとした気遣いや尋ね方でどれだけでも自由自在に変えることができるということに気づいて、それが自信にも繋がり、いろんな接し方ができるようになった。内面改革ができたというのが、先程報告した事例に活きているのではないかなと思います。

辻村) その子達自身になりきれない、何が効いているかというのはその子にしか分からないというようなどころがあるので、さあどうしようかと今頭の中で練ってたんですけど（笑）。今回で連携プログラムを2回経験しました。各担任が言ったのは、ふだん教室にいて1年間も担任をして、2月ですから少なくとも10ヶ月以上付き合いをしている子達に対して、今日初めてあんな顔見たという声があがっていました。ふだんは借りてきた猫みたいな女の子が妙にハイテンションであったり、今回、かわいそうなチームがありまして、クラス予選当日、メインを務めるはずだった子がインフルエンザで休んで、クラス代表になれなかった。別のチームが出て、そのころには治って出て来てるんですけども「俺さえいれば、わがチームが出てもっといい発表ができたのに」と意外な気の強さというか出たがりというか、そういう側面を教師の側が見ることができた。

ふだんの一方通行的な授業の中では見えない何かが見えているということは、そこに何か養われている、育てられている、発露されているということなわけですから、そこにふだんと違うものがあるということが分かると思います。効用で言うと、ファシリテーションは、教師の側に大きな効用があるように思います。ひとつは生徒の知らない一面が見えることで、もうひとつは教師の意識の変革を迫る部分があるということです。先ほど赤澤さんがおっしゃっていましたが、教育の在り方に変革が迫られておりまして、教育する客体から学ぶ主体へであったり、押し込まれる知識からそうではないあり方へとパラダイムのチェンジ

があるんでしょうけども、実は中学や高校というのは、まだ旧弊な社会です。そういう中で生徒観や学習観というもの、変わらない部分もあると思いますが、新しい何かが必要であるということに、ちょっとずつ世の中に遅れた形で、中学高校の教師が気づくというひとつのきっかけになるのではないかということを感じました。

高橋明) 班長研修を通して、僕らの代が1回目、初めての代だったので、これからも来年度、再来年度と続いていくと思うので、僕らが最初なので成果というのは…。今は草創期ですよ。まだこれから何十年後に結果が出るんじゃないかなと思います。

北村) (高橋明さんに) ロングスパンですね (笑)。すぐに効くものだけがすべてではないと。ありがとうございました。

先ほどの辻村さんのお話では、高校は旧弊な世界だということだったんですが、私自身が附属高校のプログラムに参加してみて、なんと高校生の頭は柔軟なんだろうということを感じたんですね。それが大学にいったら「なぜ？あの柔軟さはどこへ？」という風に思っていたんですが、もしかしたら、高校での柔軟さをうまく保てるようなかわりというのも大学において必要になってくるかなという風に感じました。そのあたり何かご意見のある方いらっしゃいませんか？

赤澤) 「授業」でやっているという難しさもあるのかなと思います。大学の授業の成績評価は絶対評価の世界で決まると思うんですよね。何か学習目標があってそれをこなすことで評価することが多い中で、「キャリア・Re-デザイン I」は授業自体が「参加した人、意見を言った人が A (評価)」とかじゃなくて、受講の前後で、自分の姿勢とか考え方とか周りとの関係性においてどういう変化をしたかが最大の成果だと思うのですが、ふだんの授業では「いい意見を言わないといけないのではないか」とか「どんな風に参加すれば評価されるんだろう」みたいなことがあって、いったん柔軟さが失われるのかもしれないと今感じました。一方で私達が活動しているボランティア活動の現場は、そういう (単位などの) 評価がない世界ですから、一人ひとりの変化や成長に向き合うときも、別に成績とか評価を気にせず発言している部分が多少あるのかなと思います。

筒井) 私は大学教員で政治学、メディア論をやっているのですが、この授業自身を専門家である教師自身がそろそろ「もうできませんよ」という宣言をしないといけないなと思っています。つまり、コンテンツの専門家が「手法」や「環境づくり」そのものをすべてやらなけ

ればいけない時代は完全に終わった、そして皆さんの力で助けてください、一緒にやりましょうと。学生も含めて。いつまでも既得権益に沿った形での組み方はもう限界が来ている。この辺のところをやらないと。「素人が社会を変える、専門家以外が変える」。大学でも高校でも一緒ですよ。そこで教師は、じゃあ生徒に教えてもらおう、学生に教えてもらおうという、そういうところから次が始まるんじゃないかと思います。

北村) ありがとうございます。ところで、学ぶ主体である学生の高橋明さんにお聞きしたいと思いますが、大学の授業でファシリテーション的な経験はなにかありますか？

高橋明) そういう授業はないです。

北村) あったらいいなと正直思いますか？

高橋明) 僕の活躍できる場をいただけるのであれば。

北村) すばらしいコメントをありがとうございます。ファシリテーションは、実はキャリア科目で積極的に取り入れている手法なんですけど…。

ここで会場の方に質問ですが、どんな関わり方でも結構ですので、大学でファシリテーションという手法をすでに取り入れているという方はいらっしゃいますか。(反応ない)

ゼロでしたね。誰かいればお聞きしようかと思ったんですが。

それでは最後にお伺いします。京都産業大学の中でもファシリテーション、F 工房が広く認知されているかと言えば、まだまだ遠い状態かと思います。実際に皆様のように休みの日にも関わらず足を運んでくださる方とは(ファシリテーションマインドは)共有しやすいんですが、「自分のところは無理」と思われている方もいらっしゃるかと思います。そういった方も含めて、ファシリテーションをひろげるためにどう一歩を踏み出すか、実践例なども含めてご意見をお願いします。

高橋明) (ファシリテーションの) 知名度があまりないので、ウィキペディアで調べてほしいです。協働促進と書いてあります。

辻村) 現場に引っ張り込む技という気がします。F 工房の雰囲気はいいところじゃないですか。あのカラカラっと開けて中に入るという一歩、そこやと思います。(注：F 工房の入口

は引き戸式になっている)

高橋誠) 本学の場合ですとF工房に関連する授業がありますので、そこに職員について参加するのが一番いい取っ掛かりだと思います。私の場合は、まだこういう風にファシリテーションを実践しましょうという明確なマニュアルがない状態でファシリテータをやることになって(注:高橋氏は業務命令としてファシリテータに参加)、手探り状態でやるので、最初はすごく指導的に入って、今度は傍観みたいな感じになってという感じでやっているうちに1年間が過ぎてしまったのが実際のところなので、事前研修の段階から職員等も巻き込んでいくとよりスムーズに入れるし、参加してよかったと思えるような環境が整備されるんじゃないかと思います。そうしたらもっとファシリテーションは広がるかなと。

赤澤) 私たちのところ(ユースビジョン)にボランティアやインターンシップがしたいとやってくる学生は、割と積極的な方が多いかなという風に思います。大学の中で取り組む場合、さほど積極的でない多数の学生にもこういった場を経験できる機会が提供されるのがいいと思います。授業の事例発表をしていく中でいいなと思ったのは、「キャリア・Re-デザインI」の授業が2コマ連続であるということです。普段の大学の授業は90分が多いのですが、90分だと話し合いをして終わりという感じですよ。その後の、話し合いの中で自分の気持ちはどう動いたか、参加する姿勢が変わったか、日常生活にどう活かしてゆきたいかというところの振り返りや分かち合いが大事だと思います。この方式をキャリア形成の科目だけでなく、その他のいろんな授業の中で部分的にも取り入れてもらえればいいと思います。そこで考えたこと、話したことが、同じ大学の中で、成果・成長となって勉学や就職やその他いろんなところで学内で繋がっていくような環境整備ができれば、ものすごく効果が高まるのではないかと思います。

筒井) 実は今、大学から優秀な学生が逃亡しています。そこを見なくてはいけない。逃亡した人がどこに行くかという、他大学の学生や社会人と繋がっています。ファシリテーションの手法を使っています。社会をよくしたいという活動を行っています。TwitterやiPhoneを使っているユーザーが多い。赤澤さんのユースビジョンのような団体は先駆けのような団体ですが、そういった団体は現在いっぱいありますので、そこも含めた大学の教育が必要だと思います。

第 3 部 「体験!ファシリテーション」 報告

時 間 15:30 ~ 15:55

参加人数 43 名

ファシリテータ (計 11 名)

荒木豊 (経済学部)、稲垣光穂 (経営学部)、井上晴美 (教学センター)、釜場正起 (外国語学部)、鬼塚哲郎 (F 工房)、北村広美 (F 工房)、小西勇太 (法学部)、高橋誠 (総務部)、野田勤 (経営学部)、橋本正美 (キャリア教育研究開発センター)、三宅卓也 (経営学部)

全体進行 中西勝彦 (F 工房サブコーディネータ)

テ ー マ 「大学は何のためにあるのか？」

内 容 以下の手順で進行した

1. グループ分け

全体のアイスブレイクも兼ねて、名札(受付時に配付)に貼ってあるカラーシールの色が同じ人を見つけ合い、グループ分けを行う取り組みを実施した。4 名～7 名のグループを 8 つ作った。

2. ファシリテータ紹介

グループ分けが終了したら、各グループを担当するファシリテータを中西が紹介。ファシリテータの名札にも、同様にカラーシールが貼ってあり、その色のグループを担当した。

3. グループワーク開始

各グループで「大学は何のためにあるのか？」について、ファシリテータを中心に話し合いを進めた。各グループには、半切り模造紙・付箋・A4 普通紙・水性マーカー (8 色) 太・細を配り、何をどう使用し、どのように進行するのかは、ファシリテータに一任した。

4. まとめ

各グループでまとめた模造紙は、グループワーク終了後会場に掲示し、報告会終了後に自由に見ることができる形にすることで、共有を図る形とした。

コメント

参加者アンケートには「時間の短さ」についての言及が目立ち、報告会全体のスムーズな進行と、余裕を持ったプログラムデザインの重要性が指摘された。

しかし、選択式の質問に対して「参考になった」、「やや参考になった」という回答が大半を占めた。また「参加型プログラム」や「学生ファシリテータとの協働」、「短時間で色々と話し合えたこと」が参加者に大きなインパクトを与えたことも、アンケートから明らかとなった。

報告会の最後のプログラムとして、ファシリテーションを体験してもらえたことは、ファシリテーションについての理解を深めると共に、参加者同士のネットワーク構築に貢献できたことも踏まえて、大きな意味があった。一方で運営時間が短く、ワークの取り組みが消化不良に終わったグループもあったことが、今後の課題と言えよう。



第3部開始時点の様子
休憩明け。
参加者が立ったまま説明を聞いている。



グループ分けの様子
同じ色のシールを付けた人を探し中。
集った所から近くのテーブルに座った。



ファシリテータ紹介中
全体進行の中西（写真右端）がファシリテータを紹介。
ファシリテータは自分のシールの色のグループへと入る。



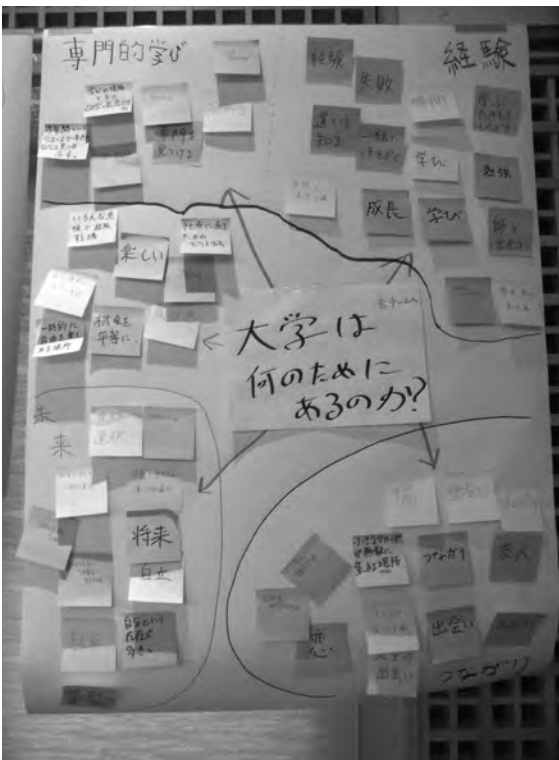
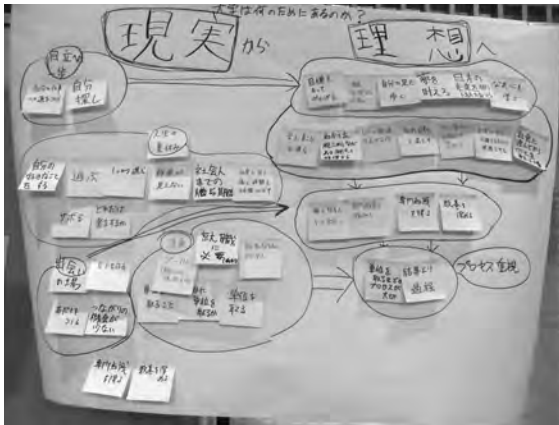
グループでの自己紹介の様子
ファシリテーターが中心となってグループ内で自己紹介を実施



グループワークの様子
各グループがそれぞれのやり方でワークを進行。白熱しているようです。



そろそろ話し合いの内容をまとめにかかります。



各グループでまとめた模造紙
話し合いの内容はもちろん、話の進め方や
使うツールもグループによって様々。
話し合いで出てきた意見を模造紙にまと
め、グループワーク終了後に壁に貼り出し、
それをネタに交流会が盛り上がりました。

閉会挨拶（若松 キャリア教育研究開発センター長）

「ファシリテーションがひらく新しい大学の可能性」ということで、事業報告、実践報告、実際に皆さんにファシリテーションを体験していただく機会を通して、ファシリテーションの手法が皆さんのところで広げていただきますよう、また、今日これを一つの機会として、ネットワークが広がっていくことを、さらに今後の楽しみにして、まだ交流会もありますので、広がっていきますことを楽しみに、閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はありがとうございました。

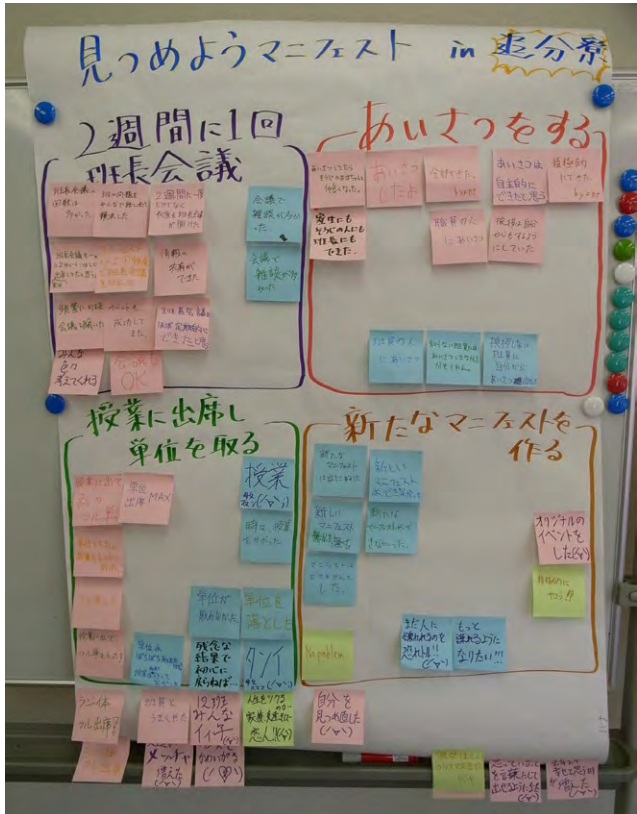


参考写真 F 工房でのファシリテーション実践

付箋を使っての意見集約の例

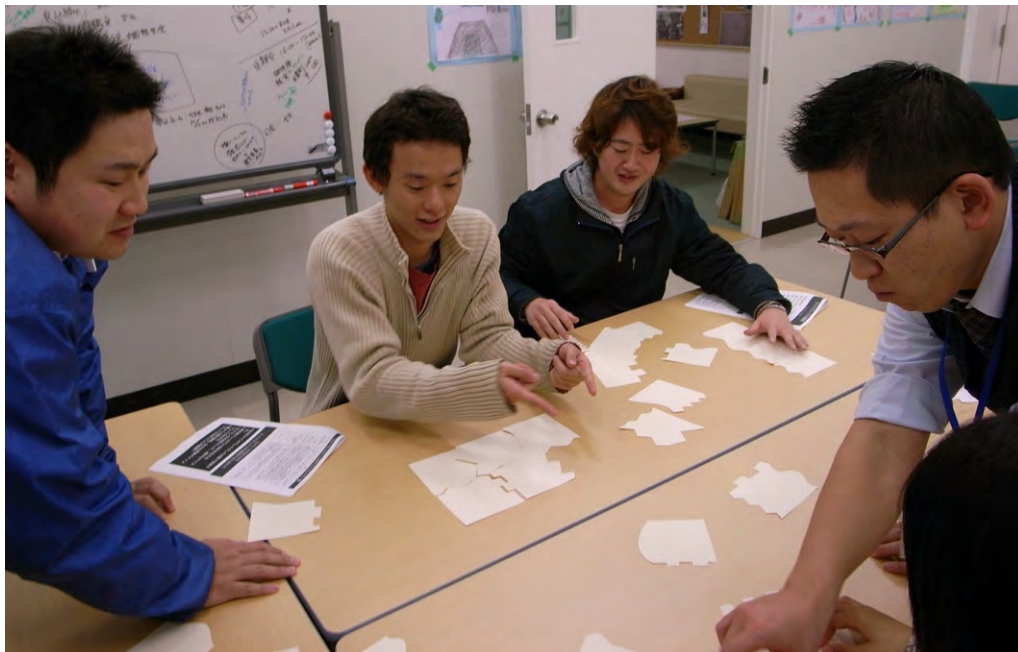


「Cinema & Talk Session (P.8)」で映画を観た人たちに付箋に感想を書いてもらい、それを分類したもの。



「学生寮班長研修会 (P.13)」で、班長たち自身がマニフェスト評価のコメントを書き、集約し、分類したもの。

グループワークの様子



「The Ice Break (P.8)」で、学生と職員がアイスブレイクゲームに奮闘中。



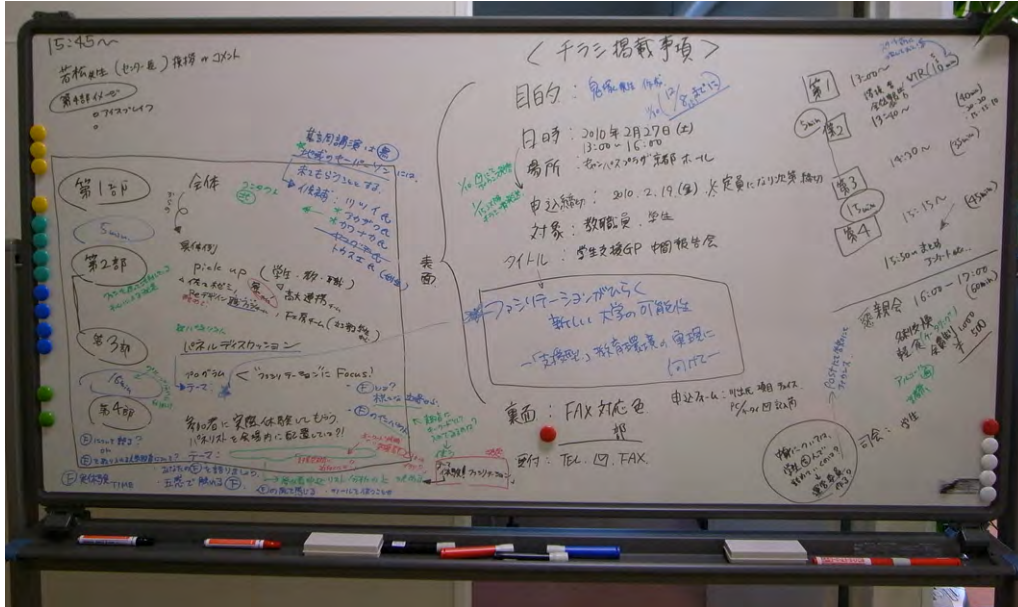
「ファシリテータ研修会 (P.10)」で、学生・教員・学外参加者らが模擬会議中。

アートコミュニケーション・プログラムの様子

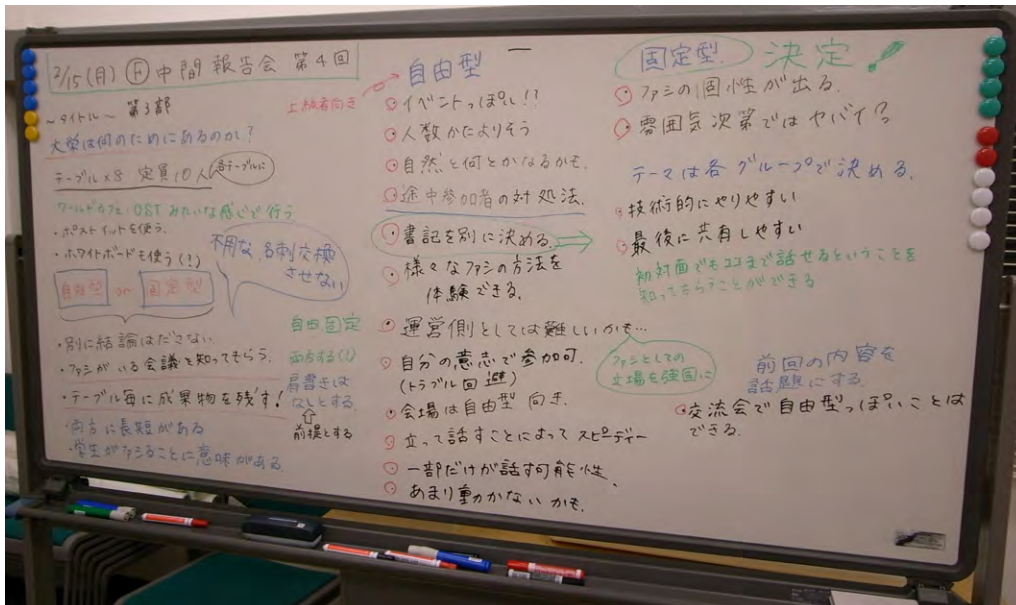


「ファシリテータ研修会 (P.6)」 4人のメンバーが、1人1色のクレヨンを持ち「田舎」というテーマで、4回ローテーションさせながら絵を完成。その後、描き始めの人が自分のイメージを説明し、4人の協働ぶりを振り返る。

ファシリテーショングラフィックの例



スタッフミーティングでのグラフィック。写真に撮って、後で議事録化する。



「中間報告会 (P.9)」

実行委員会で学生ファシリテータの1人が初めてグラフィック化に挑戦。出来映えは……？

平成20年度採択 「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」
京産大発ファシリテータマインドの風
～ファシリテーションの定着による学生支援改革～
平成21年度 活動報告書

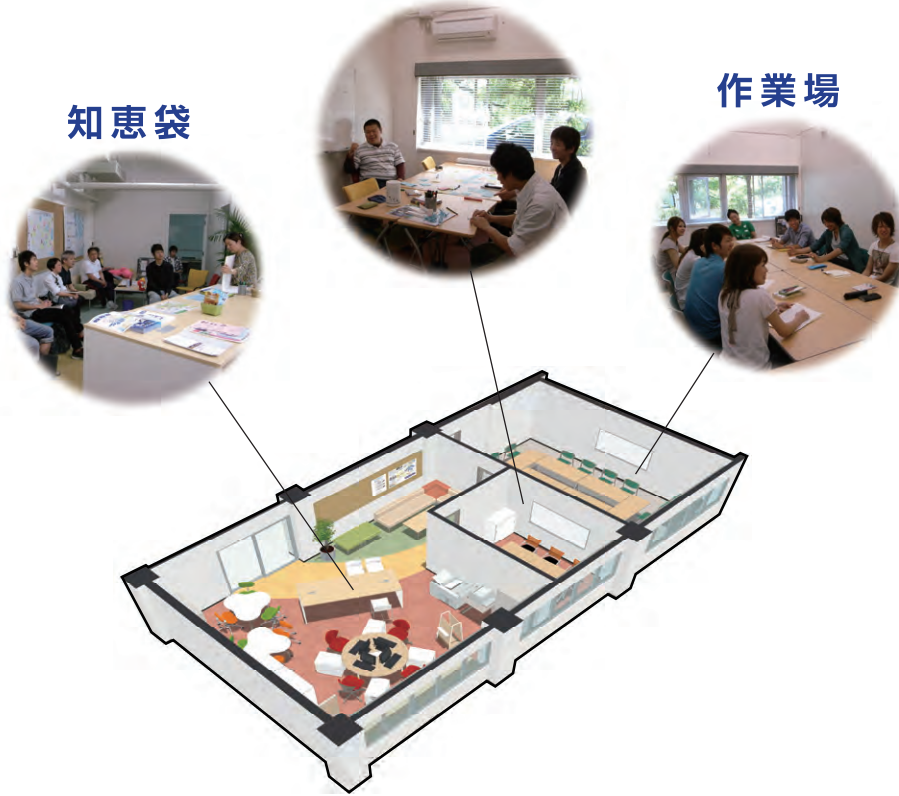
2010年3月31日発行

発行 京都産業大学
編集 京都産業大学キャリア教育研究開発センター
〒603-8555 京都市北区上賀茂本山
TEL：075-705-1963 FAX：075-705-1976
E-mail：ksu-f-acilitator@star.kyoto-su.ac.jp

道具箱

作業場

知恵袋



京都産業大学
キャリア教育研究開発センターF工房